

東京分室開室にあたって	1
2016(平成28)年度「指定研究」資料室等研究組織一覧	2
2016(平成28)年度「指定研究」等研究目的紹介	4
2016(平成28)年度「一般研究」研究組織一覧	9
2016(平成28)年度一般研究(新規採択課題)研究目的紹介	11
学術交流協定に基づく共同研究	16
海外研究調査報告	17
国内研究調査報告	21
公開講演会・公開研究会	24
東京分室PD研究員個人研究紹介	30
彙報	33

東京分室開室にあたって

真宗総合研究所東京分室長 名誉教授 池上 哲司

2016年4月27日(水)、親鸞仏教センター移転開所式と合同で大谷大学真宗総合研究所東京分室開所式がおこなわれた。本山からは里雄康意宗務総長が、本学からは木越康学長が参列されたことから、親鸞仏教センターおよび真宗総合研究所東京分室への期待がいかに大きいものかが感じられ、東京分室の果たすべき役割の重大さに身が引き締まる思いである。

1901年、清沢満之を初代学監とする真宗大学が東京巢鴨の地に移転・開校されたが、10年後の1911年には京都に戻った。その後、真宗大学は真宗大谷大学、大谷大学と名称を変え、今回105年ぶりに大学の施設を東京湯島の地に置くことになった。仏教センターの建物の四階フロア約80㎡という広さと、現在時点で総勢4人という小さな分室ではある。しかし、本分室開設実現のために真宗総合研究所にかかわる教員・職員が示した熱意、さまざまな点で支援して下さった本山および親鸞仏教センターのご厚意を思うと、小さくともびりりと辛い分室として、優れた研究員を養成してゆきたいと考えている。

では、「優れた」とはどういうことだろうか。学問的、客観的に優れた研究がなされねばならないことはいうまでもない。独断的で独りよがりの研究は排されねばならない。しかし、それだけのことなら、わざわざ東京にまで出てくる必要はなかったであろう。清沢満之が東京巢鴨に真宗大学を移転・開校したのと同様に、今回の真宗総合研究所東京分室開室には、東京という激しく流動する思想の場で自らの思索と研究を鍛え直すことが目指されているのである。このことは、開所式での木越学長の「首都圏で研究を進めるにあたっては、分室の席に座っているのではなく、外に出て他分野の研究者との交流を重ねてほしい。視野を広げ研究を深め、その内容を社会に開示していく若手研

究者の育成が、この東京分室に願われている」という言葉にはっきりと示されている。

東京というよい意味でも悪い意味でも刺激の多い地で、それらの刺激に身を晒し、尚それらに流されない自らの立つ場所を確認するためにはどうすべきであろうか。その答えが、自らの研究内容を社会に開示していくということに求められている。論文を学会用語や専門用語で書くことは社会への開示の一つの方法ではあるが、それだけでは不十分である。社会を構成しているのは、専門用語などを知らない圧倒の多数の人々だからである。専門用語を用いずに日常の言葉で自らの研究内容をどれだけの確に表現できるか、そこが勝負である。多くの人々に理解してもらえる言葉で表現することができて、はじめて社会への開示が可能となる。

実は、この開示は社会にだけ向かうものではない。いや、むしろこの開示は自分自身に向かうものであることが重要なのである。他者に理解できる言葉で表現することによって、自らの考えや研究の意味が自分自身にも理解できるものとなる。つまり、そこでは研究者自身のあり方が自覚的に捉え直されているのである。学問の世界とはまったく無縁な両親から「おまえは一体なんのために学問研究を行っているのか」という問いに対して、彼らに理解してもらえる言葉で明瞭に答えることができる研究者、それが優れた研究者ではなかろうか。

そのような研究者育成を目指して東京分室の小さな第一歩が踏み出された。覚束ない足取りではあるが、多くの人々のご支援を頼りに一步一步進んでいきたいと考えている。

2016(平成28)年度「指定研究」「資料室」等研究組織一覽

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
教如上人研究	<p>研究課題 真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究</p> <p>研究代表者 草野 顕 之</p> <p>研究員 草野 顕 之 (教授・日本仏教史学) 平野 寿 則 (准教授・日本近世史・近世仏教史・真宗史) 東 館 紹 見 (教授・日本仏教史) 福 島 栄 寿 (准教授・日本仏教史・近代日本思想史) 川 端 泰 幸 (講師・日本中世史)</p> <p>嘱託研究員 大 桑 齊 (本学名誉教授) 山 田 哲 也 (裏千家学園講師・本学非常勤講師)</p> <p>研究補助員(RA) 老 泉 量 (博士後期課程第1学年)</p>
清沢満之研究	<p>研究課題 清沢満之の生涯と思想の研究を更に進め、その成果を『清沢満之全集』の補遺として、発刊する。</p> <p>研究代表者 藤 原 正 寿</p> <p>研究員 藤 原 正 寿 (短期大学部准教授・真宗学) 加 来 雄 之 (教授・真宗学) 一 楽 真 (教授・真宗学) 村 山 保 史 (教授・西洋哲学・日本哲学) 西 本 祐 攝 (短期大学部講師・真宗学)</p> <p>嘱託研究員 安 富 信 哉 (本学名誉教授) 名 畑 直日児 (真宗大谷派教学研究研究所研究員)</p> <p>研究補助員(RA) 井 上 泰 之 (博士後期課程第2学年) (RA) 荒 金 拓 (博士後期課程第2学年)【6月1日付採用】</p>
国際仏教研究	<p>研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開</p> <p>研究代表者 井 上 尚 実</p> <p>研究員 井 上 尚 実 (短期大学部教授・真宗学) Robert F. Rhodes (教授・仏教学) Michael J. Conway (講師・真宗学) 藤 田 義 孝 (准教授・フランス文学) 井 黒 忍 (准教授・東洋史学)</p> <p>嘱託研究員 Michael Pye (マールブルク大学名誉教授) James C. Dobbins (オーバーリン大学教授) Mark L. Blum (カリフォルニア大学バークレー校教授) Paul Watt (早稲田大学留学センター教授) 羽 田 信 生 (毎田周一センター所長・本学非常勤講師) 阿 満 道 尋 (アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授)</p> <p>研究補助員(RA) 梶 哲 也 (博士後期課程第3学年) (RA) 味 村 考 祐 (博士後期課程第3学年)</p>
ベトナム仏教研究	<p>研究課題 ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究</p> <p>研究代表者 織 田 顕 祐</p> <p>研究員 織 田 顕 祐 (教授・仏教学) 浅 見 直一郎 (教授・東洋史学) 采 翠 晃 (准教授・仏教学)</p> <p>嘱託研究員 箕 浦 暁 雄 (准教授・仏教学)</p>

		桃木至朗 (大阪大学教授) 大西和彦 (ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員) 福島重 (本学非常勤講師)
西藏文献研究	研究課題 研究代表者 研究員 嘱託研究員 研究補助員(RA) (RA)	チベット語文献及びパリー語貝葉写本のデータベース化 三宅伸一郎 三宅伸一郎 (准教授・チベット学) 上野牧生 (短期大学部講師・仏教学) 武田和哉 (准教授・人文情報学・歴史学・考古学) 白館戒雲 (本学名誉教授) U. Erdenebat (モンゴル国立大学総合科学部教授) 清水洋平 (本学非常勤講師) 高本康子 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員) 伴真一朗 (2015年度西藏文献研究嘱託研究員) 舟橋智哉 (2015年度西藏文献研究嘱託研究員) LAMA O ZHUOMA (博士後期課程第3学年) ARILD II BURMAA (博士後期課程第2学年)
東京分室指定研究	研究課題 研究代表者 研究員	宗教的言語の受容／形成についての総合的研究—哲学的・宗教学的・人類学的視点から— 池上哲司 池上哲司 (本学名誉教授) 松澤裕樹 (PD研究員・西洋哲学) 田崎郁子 (PD研究員・特別研究員・文化人類学) 藤原智 (PD研究員・真宗学)

【資料室】

名 称	研究課題及び研究組織	
大谷大学史資料室	研究課題 室長 嘱託研究員 研究補助員(RA)	大学史関係資料の収集・整理 松浦典弘 (研究所主事・准教授・東洋史学) 戸次顕彰 (本学非常勤講師) 松岡智美 (博士後期課程第3学年)
東本願寺海外布教資料室	研究課題 室長 嘱託研究員	大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理 桂華淳祥 (教授・東洋史学) 松浦典弘 (研究所主事・准教授・東洋史学) 李曼寧 (2015年度東本願寺海外布教資料室嘱託研究員)
デジタル・アーカイブ資料室	研究課題 室長	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築 松浦典弘 (研究所主事・准教授・東洋史学)

【特別プロジェクト】

名 称	研究課題及び研究組織	
大正新脩大蔵経テキストデータベース (SAT) 現代語訳研究	研究課題 研究代表者	『歎異抄』の現代語訳 井上尚実 (短期大学部教授・真宗学)

2016（平成28）年度「指定研究」等研究目的紹介

教如上人研究

真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究

研究代表者・教授 草野 顕之
(日本仏教史・真宗史)

真宗大谷派・東本願寺開祖の位置にある教如上人の研究は、「大谷派なる精神」、大谷派存立の理念と存在理由を明らかにする意義を有している。本研究はそのような目的のもと、教如上人に関する史料の全面的・組織的な調査を実施し、それらを体系的に整理して、将来的には出版・公刊し、広く内外に成果を問うことを目的とするものである。

研究の前提として、2013（平成25）年に教如上人の四百回忌法要が真宗本廟および各地で執行されて以降、教如上人に対する関心が高まっている点が第一に挙げられる。また、そのなかで、教如上人に関する新史料の発見もあい次いでおり、調査研究の好機であると考えられる。この機会を捉え、教如上人に関わる史料の収集・調査・研究を行うことを本研究の目的とする。

なお、本研究では、伝記史料・教学的史料・東本願寺別立・教団形成過程を解明する史料など、教如上人に関わる全ての史料を調査対象として調査研究を進めている。

特に調査・研究の中心にするものとしては、消息類、名号・本尊・法名状など教如上人が裏書して授与した法宝物、開板聖教類などの一次史料、および各地に遺される由緒・伝記なども調査の対象とし、史料画像およびデータを蓄積してきた。

2016年度は、いくつかの寺院調査を実施しつつ、これまでに調査・収集してきたデータを整理し、この3年間で得られた知見とあわせて、データベースおよび報告書の完成をめざす。

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究を更に進め、その成果を『清沢満之全集』の補遺として、発刊する

研究代表者・准教授 藤原 正寿
(真宗学)

本研究は、本学・学祖である清沢満之の生涯と思想に関する研究調査を行い、その成果をすでに刊行されている『清沢満之全集』（岩波書店）を補完する史料として公にすることを目的とするものである。2002年の清沢満之100回忌にあわせて刊行されたこの『全集』は、清沢満之個人についての研究のみならず日本の近代の思想研究なかんずく、仏教研究に資する成果であった。

清沢満之の全集については、本研究所での研究成果であるこの全集以前にも幾度か編纂されており、とくに西村見暁らによって編纂された『清沢満之全集』（法藏館、1953～1956）は先行する全集として優れた業績であった。その中で特に第一・三・五・八巻に収められている清沢満之に関する追憶・資料編は、本研究所の全集には収録されておらず、現在でも清沢満之の研究者にとっては貴重な資料となっている。しかしこの全集は現在絶版状況にあり、入手が困難になっている。そこで本研究では、この法藏館発刊の『全集』第一・三・五・八巻を基礎資料として、さら清沢満之に関わるさまざまな周辺資料を再調査し、整理収集を行っていく。また、『全集』（岩波書店）発刊以降に確認された清沢満之自身に関する資料（すでに数点の資料が確認されている）を調査収集し、公にしていくことも目的としている。

今年度は、昨年度に引き続き、『清沢満之全集』刊行時の研究資料、記録等を精査し、どのような課題が残されているのかを再検討する。そして、今回更に調査すべき内容を抽出し、資料を渉猟することを行う予定である。具体的には、『全集』刊行以後存在が確認された資料を収集分析し、掲載の有無を確定する。

研究作業に当たっては、補遺刊行に向けて、清沢満之の終焉の寺である西方寺との協議や更なる史料調査先の検討および調査、存在が確認された史料の収集・整理、翻刻作業などを行っていく予定である。

これまで真宗総合研究所においてなされてきた清沢

満之に関するさまざまな研究の成果を継承しながら、未だ全集等に掲載されていない貴重な史料の渉猟整理およびデジタル化した史料のデータベース構築と、史料の翻刻を中心に、昨年度に引き続いて作業を進め、清沢満之に関する研究の基礎資料を提示していくことができるようにしていきたいと考えている。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

近年、仏教学・宗教学の分野における国際化は以前にも増して急速に進んでおり、真宗を中心とした仏教・浄土教研究についても外国語による研究を視野に入れなければならない状況になっている。今年度は英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班の三班の体制で研究を進め、それぞれ下記のような研究テーマで活動する。

〈研究テーマ〉

- ①英米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。
- ②ドイツ・フランス班：プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版を行う（ドイツ）。近代化と宗教に関する研究、および翻訳出版を行う（フランス）。
- ③東アジア班：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究を行う。

〈活動内容〉

《英米班》

- ①真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムの成果出版準備
2015年6月26日(金)・27日(土)の2日間、大谷大学で『*Cultivating Spirituality*』(SUNY, 2011) 出版を記念して開催されたシンポジウムでの研究成果の公表に向けて、編集作業を行う。
- ②エトヴェシ・ロラード大学 (ELTE) と共催の第2回国際仏教シンポジウムの開催

ハンガリーのELTE東アジア研究所の共催により、「仏陀の言葉とその解釈」というテーマのもと、第2回共同シンポジウムを2016年5月26日(木)・27日(金)の2日間、大谷大学で開催する。

③真宗関係の翻訳研究

阿満道尋嘱託研究員を中心に進めてきた英文教師課程教科書『浄土の真宗』を、真宗大谷派北米開教区真宗センターから出版する。さらに『教団の歩み』英訳の問題点確認と編集作業に協力する。また、英米班として次に取り組むべき中長期的翻訳研究の真宗関係テキストの選定を行う。

④公開講演会の開催

国内外で活躍している仏教学・真宗学関係の研究者を招聘し、公開講演会を3回程度開催する。第1回は、共同シンポジウムの開催に伴って、エトヴェシ・ロラード大学人文学部学部長のボルヒ・ラズロ教授による講演を、5月25日(水)に予定している。

⑤真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理

電子ジャーナル掲載論文を含めた欧文の仏教学・真宗学関係の近刊データを集めて整理し、公開できるように準備する。国際仏教研究が所蔵する欧文図書雑誌等について、移管できるものは図書館で検索閲覧できるようにする方向で図書館と協議を進める。

《ドイツ・フランス班》

- ①プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版
浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究の継続と成果の出版が本研究の目的である。マールブルク大学神学部教授Dietrich Korsch氏の *Martin Luther: Eine Einführung, Zweite Auflage* の翻訳出版を準備中であり、進捗の確認を行う。
- ②近代化と宗教にかんする研究、および翻訳出版
「近代化と宗教」というテーマでの研究を継続する。2010年にフランス国立高等研究院 (EPHE) の宗教社会学部門と開催したシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」の成果刊行について進捗状況を確認する。
- ③研究交流の新規企画を検討
フランスの仏教研究、真宗研究の現状、とりわけEPHEにおける宗教研究の動向を調査し、新たな研究交流の可能性を探る。

《東アジア班》

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づ

き、本年度においても引き続き、双方の研究者が往来し、本テーマに関わる共同研究を実施することとし、本学から2名を派遣、先方から2名を招聘し、それぞれ公開研究会を開催する。

西藏文献研究

チベット語文献及びパーリ語 貝葉写本のデータベース化

研究代表者・准教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

本学に所蔵されている北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献、タイ王室寄贈パーリ語貝葉写本(大谷貝葉)は、本学はもとより国内外のチベット研究やパーリ仏教研究のための重要な資料である。本研究は、これら重要な文献資料を

- (1) 専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること
- (2) 重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開することを目的としている。この目的を達成するために、2016年度は以下の研究を進める。

1. チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

『中観学説決択集』(no.13949～13954) および『クンプム寺誌』(no.11861)の電子テキストをWeb上で公開する。『プラサンナパダー註』(no.13964)の公開に向けた作業を行う。本学所蔵チベット語文献の再評価のために、稀観文献の抽出作業を行う。『プトン仏教史』について、公開済みの電子テキストの見直しを行うとともに、邦訳に向けた研究会を行う。チベット語訳でのみ現存するインド仏教撰述文献のうち、『釈軌論』の研究を行う。

2. モンゴル国立大学との共同研究

研究協定の再締結を受け、研究交流を継続するとともに、第1期(2013-15年度)における研究活動の成果物として、報告書の刊行を行う。また、第2期(2016-18年度)の共同研究に着手し、その一環として寺本婉雅旧蔵『モンゴル仏教史』の研究を行う。

3. パーリ語貝葉写本のデジタル化

稀観文献抽出作業に資するため、タイ中部域王室寺院所蔵写本リストの整理作業を完了させる。タイでの現地調査を実施し、その成果を踏まえ、写真撮影およびローマ字転写化すべき稀観文献を決定する。また、資料の来歴を明らかにするため、付随する資料(包み布、挟板)についても研究を進める。タイ・スリランカ・欧米に所在する貝葉写本に関する学術情報の収集も行う。

4. 寺本婉雅関連資料の研究

日記および研究ノートの翻刻および研究を行う。宗林寺および村岡家資料目録を刊行する。

5. 海外の研究者・研究機関との交流

国際チベット学会や北京国際チベット学セミナーなどの国際学会に参加する。中国蔵学研究中心との研究交流を行う。

6. その他

随時、チベット学・パーリ学・モンゴル文献学等に関する研究会を開催する。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー 宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授 織田 顕祐
(仏教学)

ベトナム社会主義共和国のベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された「学術交流に関する協定」に基づき共同研究を推進する。調査・研究協力のみならず研究者育成などベトナム側からの要請に応じて、仏教研究に関する相互学術交流を行う。

ベトナムとの学術交流は、大きく二つの意義を持つ。第一に、これまで十分検討されてこなかったベトナム仏教の調査を実施し、ベトナム仏教の一端を明らかにする。第二に、その活動を通して得られたベトナム仏教の独自性に照らして、我々もまた日本仏教史や東アジアの仏教の展開を外側から再検証する視点を獲得。

上記の研究目的を達成するために、宗教研究院と相談しながら、具体的には以下を実行する。

1. 「日本仏教概説」の編纂(その内容点検、ベト

- ナム語訳作業の開始。そのための研究協議・相互交流。)及び、「ベトナム仏教概説」日本語訳の推進。
2. 北部ベトナム寺院調査・所蔵文献・版木調査の更なる推進と「寺院資料集」への準備。
 3. ベトナムにおける「日本語研究教育を含む日本研究・東アジア研究・仏教研究(人文科学・社会科学分野)」の実態の把握(「日本仏教概説」「ベトナム仏教概説」翻訳作業の下準備の意味をも含む。)
 4. ベトナムの仏教(宗教)・歴史・文化に関する文献資料(海外の先行研究を含む)の収集

これらのうち、日本仏教概説の編纂は、日本の仏教思想史を独自の見識をもって提示することを意図している。日本仏教の展開を、アジア地域における異文化交流(仏教の受容・展開・完成・普及の四つの視点を日本社会の展開と重ねながら)のなかで捉え、その時々々の仏教思想の特徴を明確にしたい。これによって、日本仏教の啓蒙書をベトナム語ではじめて提供することになる。また、「ベトナム仏教概説」は、ベトナム人が著したベトナム仏教の概説書としては、日本語で読める最初のものとなる。

また、寺院調査・所蔵文献・版木調査によって、ベトナム寺院資料集がまとめられれば、日本語によるベトナム仏教研究のための基礎資料ともなる。

これらによってベトナムにおける仏教受容の一側面が明らかになれば、アジアにおける仏教受容・伝播を軸とした相互交流の実態を解明する手掛かりを得ることにつながり、東アジア・東南アジアの地域文化史に新たな視点を提供することが可能になる。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 松浦 典弘
(東洋史学)

本資料室の任務は、大谷大学の歴史にかかわる様々な資料を収集・整理し、適切な保管の方策を講じた上で、それらを広く公開し活用できるようにすることである。未だ十分に整理できていない所蔵資料の分類整理を継続的に進めながら、図書館1階エントランスホールに借り受けている展示ケースを活用し、年2～3回のスポット展示によって所蔵資料の公開・展示を

行う。

また、今年度も引き続き全国大学史資料協議会の研究会(西日本部会)に参加し、他校のアイデアやノウハウを持ち帰って、本学における大学史関係資料の保存・公開方法の改善に役立てる予定である。

東本願寺海外布教資料室

大谷大学図書館所蔵 「東本願寺旧蔵資料」 海外布教関係部分の整理

室長・教授 桂華 淳祥
(東洋史学)

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。しかしそれは事務書類綴りとして未整理の状態に残されているもので、その内容はもとより点数すら正確には把握されていない。したがってこの状態が続けばその存在も知られず、あるいは散逸の恐れもある。

本資料室の目的は、これら未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することにある。これによって本資料の半永久的な保存が可能になるとともに、今後、当該時代の東本願寺の活動をはじめとする様々な研究に寄与することが期待される。ここに本資料を整理する意義がある。

資料は段ボール箱に入れて仮り番号を付しており、合計171箱ある。2015年度までの作業で未整理のまま残るものは50余箱となっており、本年度はその完了を目指す。具体的な方法は下記の通りであるが、史料の性質上、(a) 真宗総合研究所と(b) 図書館・博物館事務室との2カ所で行う。

- ①書類綴りの状態になっている資料についてその内容を確認し、必要事項を記録する (b)。
- ②記録された必要事項を精査しつつ「資料一覧」を作成する。また、精査に必要な情報を得るため、当該期東本願寺発行の機関誌『宗報』などによって、人事異動・布教所開設などに関する記事を整理しているの、それらと比較検討する (a)。
- ③作成された「史料一覧(原案)」と対比し、内容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする (b)。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の
デジタル・アーカイブ構築

室長・准教授 松浦 典弘
(東洋史学)

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を継続的に行う。その一環として、2010年度より本学図書館所蔵古典籍を書誌学データベースとして登録する作業を続けており、今年度も引き続きデジタル・アーカイブ化を進めていく。ただし、作業の完了までには、なお歳月を要すると見込まれる。

SAT

大正新脩大蔵経テキストデータ
ベース (SAT) 現代語訳研究

研究代表者・教授 井上 尚実
(真宗学)

大蔵経研究推進会議を中心に進められている大正新脩大蔵経テキストデータベースに新たに現代日本語訳を付加する事業に、大谷大学から協力するための研究会として今年度初めに立ち上がった。今年度はトライアルケースとして『歎異抄』(大正蔵No.2661)の現代語訳を3人のチームで担当する。具体的方法としては、仏教伝道協会の「英訳大蔵経」(BDK English Tripiṭaka)所収の坂東性純先生とハロルド・スチュワートによる『歎異抄』英訳(Shōjun Bandō, Harold Stewart, trans., *Tannishō: Passages Deploring Deviations of Faith*)を「中学生でも理解できる平易な現代日本語」に翻訳する。真宗学科の修士課程学生1名(M1, 和田良世)と博士課程学生1名(D3, 東真行)が分担して下訳を作り、教員1名(井上)を加えた3名で定期的に研究会を開いて訳語・訳文について検討し、最終的な現代語訳を完成する。このトライアルが成功して軌道に乗れば、来年度以降、大正新脩大蔵経所収の他の真宗関係文献についてもBDK English Tripiṭakaからの現代日本語訳というかたちで発展的に継続できる見通しである。

東京分室指定研究

宗教的言語の受容／形成に
ついての総合的研究

—哲学的・宗教学的・人類学的視点から—

研究代表者・名誉教授 池上 哲司
(哲学・倫理学)

真宗総合研究所東京分室での最初の共同研究となる本研究は、分室設置のねらい、すなわち東京という激しく流動する思想の場で自らの思索と研究を鍛え直すことを目指して、宗教において語られる言葉が現実に生きるわれわれにとってどのような働きをもたらすかを解明しようとするものである。その際、言葉を受け取り、言葉を伝える者としての研究者自身のあり方そのものも自覚的に捉え直されることになる。

以上のごとき課題の下、松澤研究員は名高い神学博士としてラテン語による数々の聖書註解を残したマイスター・エックハルト(ca. 1260-1328)を取り上げる。というのも、エックハルトは一般信徒に向けたドイツ語説教では、正統なキリスト教思想の枠を逸脱した言説をなし、教皇庁から異端の刻印を押されてしまうからである。なぜエックハルトはドイツ語説教で異端的言説をなすに至ったのか。彼のラテン語著作における聖句解釈の方法とドイツ語著作におけるそれとを比較することで、言葉を受容し伝える者としてのエックハルトの思索を明らかにする。

藤原研究員は、浄土仏教の伝統においてその中心にある「南無阿弥陀仏」という仏の名号に取り組む。というのは、この六字の言葉を受容し、讃歎するというかたちで新たな言葉が創出され、その循環として浄土仏教は伝統されてきたからである。したがって、仏の名として与えられるその言葉の探求こそ、この伝統に連なる人びとの根本課題となってきた。本研究では、その言葉の探求を、浄土仏教において広範な影響を与えた中世の親鸞(1173-1262)と、その言説を近代に受容した清沢満之(1863-1903)を中心に確かめる。

田崎研究員は、タイとミャンマーにおけるカレンと呼ばれる少数民族の事例を取り上げる。つまり、カレンのプロテスタント・キリスト教の受容を通じたローカルな言語と社会の動態を調査・研究することで、宗教の言葉が現実の日常生活に何をもたらしているのかが明らかになるはずである。なかでも、正典の翻訳によって起こるずれや形成される新しい言説、解釈の問題などに着目することで、キリスト教のみならず仏教との比較対照も可能となるであろう。

2016 (平成28) 年度「一般研究」研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2013～2016年度「科研費」採択】 一般研究（小谷班）	研究課題 スティラマティの俱舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究 研究代表者 小谷 信千代 研究員 小谷 信千代（本学名誉教授・特別研究員） 協同研究員 箕浦 暁雄（准教授・仏教学） 上野 牧生（短期大学部講師・仏教学）
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（松川班①）	研究課題 モンゴル国カラコルム博物館における歴史研究を基軸とした 情報化と国際協働の推進 研究代表者 松川 節 研究員 松川 節（教授・モンゴル学） 協同研究員 清水 奈都紀（奈良大学非常勤講師）
【2014～2018年度「科研費」採択】 一般研究（柴田班）	研究課題 紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析 研究代表者 柴田 みゆき 研究員 柴田 みゆき（教授・情報処理学） 三浦 誉史加（准教授・英文学・英米文化） 協同研究員 松浦 亨（北海道大学病院企画マネジメント部臨床教授） 杉山 正治（本学非常勤講師） 生田 敦司（本学非常勤講師） 清水 利明（一般財団法人比較法研究センター特別研究員） 横澤 大典（本学非常勤講師） 平塚 聡（立命館大学情報理工学研究科研修生） 齋藤 晋（NPO法人国土利用再編研究所副理事長） 寺岡 茂樹（中世日本研究所女性仏教文化史研究センター研究員）
【2014～2017年度「科研費」採択】 一般研究（武田班）②	研究課題 アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究 研究代表者 武田 和哉 研究員 武田 和哉（准教授・歴史学・考古学・人文情報学） 三宅 伸一郎（准教授・チベット学） 協同研究員 渡辺 正夫（東北大学大学院生命科学研究所教授） 鳥山 欽哉（東北大学大学院農学研究科教授） 吉川 真司（京都大学大学院文学研究科教授） 横内 裕人（京都府立大学文学部准教授） 江川 式部（明治大学商学部兼任講師） 等々力 政彦（2015年度一般研究武田班②協同研究員） 清水 洋平（本学非常勤講師）
【2015～2016年度「科研費」採択】 一般研究（鈴木班）	研究課題 文化地質学：人と地質学の接点を求めて 研究代表者 鈴木 寿志 研究員 鈴木 寿志（教授・地球環境学） 廣川 智貴（准教授・ドイツ文学） 協同研究員 清水 洋平（本学非常勤講師） 長 秋雄（国立研究開発法人産業技術総合研究所主任研究員） 研究協力員(支援) 石橋 弘明（本学聴講生）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（上田班）	研究課題 ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究 研究代表者 上田 敏樹 研究員 上田 敏樹（准教授・情報工学）

	協同研究員	福 田 洋 一 (教授・仏教学) 柴 田 みゆき (教授・情報処理学) 酒 井 恵 光 (准教授・計算機科学) 高 橋 真 (講師・比較認知科学) 平 澤 泰 文 (本学非常勤講師)
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究 (松川班②)	研究 課 題 研究 代 表 者 研 究 員	モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学 融合的研究 松 川 節 松 川 節 (教授・モンゴル学) 三 宅 伸一郎 (准教授・チベット学)

【個人研究】

研究名等	研究 課 題 及 び 研 究 組 織
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究 (阿部班)	研究 課 題 移 行 期 正 義 の 社 会 的 影 響 に 関 す る 比 較 社 会 学 的 研 究 研究 代 表 者 阿 部 利 洋 (教授・社会学)
【2014～2017年度「科研費」採択】 一般研究 (田中班)	研究 課 題 ハ ン ス ・ リ ッ プ ス 解 釈 学 に お け る パ ト ス を 基 盤 と し た 知 識 教 授 理 論 の 研 究 研究 代 表 者 田 中 潤 一 (准教授・教育学・教育哲学)
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究 (福田班)	研究 課 題 初 期 チ ベ ッ ト 論 理 学 成 立 史 解 明 の た め の 基 礎 研 究 研究 代 表 者 福 田 洋 一 (教授・仏教学)
【2015～2018年度「科研費」採択】 一般研究 (井黒班)	研究 課 題 前 近 代 中 国 黄 河 中 流 域 に お け る 水 利 権 と 水 利 組 織 研究 代 表 者 井 黒 忍 (准教授・東洋史学)
【2015～2017年度「科研費」採択】 一般研究 (西沢班)	研究 課 題 口 承 と 文 献 学 の 融 合 に 基 づ く チ ベ ッ ト 後 期 中 観 思 想 研 究 研究 代 表 者 西 沢 史 仁 (特別研究員)
【2015～2016年度「科研費」採択】 一般研究 (田鍋班)	研究 課 題 ハ イ デ ッ ガ ー 「 黒 ノ ー ト 」 の 研 究 — 「 計 算 的 思 考 」 の 分 析 を 中 心 に 研究 代 表 者 田 鍋 良 臣 (任期制助教・特別研究員)
【2015～2016年度「科研費」採択】 一般研究 (藤原班)	研究 課 題 シ ュ テ ィ フ タ ー と シ ュ ト ル ム の 文 学 に お け る 「 障 が い 児 」 像 研究 代 表 者 藤 原 美 沙 (任期制講師)
【2015～2016年度「科研費」採択】 一般研究 (田崎班)	研究 課 題 キ リ ス ト 教 聖 書 の 翻 訳 に 見 ら れ る 現 地 語 語 彙 の 選 択 と ロ ー カ ル 社 会 の 再 編 研究 代 表 者 田 崎 郁 子 (PD研究員・特別研究員)
【2016～2019年度「科研費」採択】 一般研究 (脇中班)	研究 課 題 再 犯 リ ス ク 低 減 と 更 生 の 基 盤 づ く り を 目 指 し た ピ ア サ ポ ー ト 活 動 の 試 行 的 実 践 と そ の 評 価 研究 代 表 者 脇 中 洋 (教授・発達心理学・法心理学)
【2016～2017年度「科研費」採択】 一般研究 (関本班)	研究 課 題 『 苔 の 衣 』 諸 伝 本 の 本 文 研 究 及 び 校 本 作 成 研究 代 表 者 関 本 真 乃 (任期制助教・特別研究員)
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究 (宮崎班)	研究 課 題 現 存 大 藏 經 諸 本 を も ち いた 〈 阿 闍 世 王 經 〉 漢 訳 諸 本 に 関 す る 文 献 学 的 研 究 研究 代 表 者 宮 崎 展 昌 (任期制助教・特別研究員)
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究 (堀田班)	研究 課 題 ジ ャ イ ナ 教 の 死 生 観 に 関 す る 基 礎 的 研 究 — 断 食 死 儀 礼 の 規 定 を 中 心 と し て 研究 代 表 者 堀 田 和 義 (本学非常勤講師・特別研究員)
【予備研究】 一般研究 (高橋班)	研究 課 題 キ ン ギ ョ を 用 いた 質 感 の 進 化 的 起 源 の 検 討 研究 代 表 者 高 橋 真 (講師・比較認知科学)

2016(平成28)年度一般研究(新規採択課題)研究目的紹介

個人研究

ハイデッガー「黒ノート」の研究 ——「計算的思考」の分析を中心に

研究代表者・任期制助教 田鍋 良臣
(宗教哲学)

2014年3月にM・ハイデッガー(1889-1976)の遺稿「黒ノート」(1931-)が刊行され始めると、そのなかに書かれていたユダヤ人に関する言説が「反ユダヤ主義」にあたるとして、現在ヨーロッパを中心に物議を醸している。たしかに「黒ノート」のなかで、「計算的思考」や「故郷喪失」といった言葉がユダヤ人(あるいはユダヤ教)に結びつけられており、こうした言辭は反ユダヤ主義のステレオタイプであるかのように見える。けれども、ハイデッガーは同じく「黒ノート」のなかで自身のユダヤ論に関して「反ユダヤ主義とは関係ない」と注記するとともに、ナチズムの中核思想であった反ユダヤ主義を「きわめて愚かで邪悪だ」とも指摘している。では「黒ノート」に書かれたユダヤ論の真意は何か。それはハイデッガーの思索の歩みにとっていかなる意味をもつのか。

本研究の目的は、「黒ノート」の思想をハイデッガー哲学の展開のうちに捉えることで、反ユダヤ主義とは異なる、彼のユダヤ論の解釈可能性を取り出すことである。この目的を遂行するために、本研究では「計算的思考」という概念に注目する。なぜならこの概念こそ、「黒ノート」のユダヤ論の要点をなしているだけでなく、ハイデッガーのいわゆる「存在史的な」思索全体にとって決定的な役割を果たしている、と考えられるからである。

そこで本研究では、計算的思考の分析に即して、以下の4つの課題を設定する。①計算的思考の問題系をハイデッガーの思想動向のうちに位置づける。②計算的思考に対置される「算定不可能な神」の積極的な意義を明らかにする。③計算的思考に依拠したユダヤ論が科学技術批判と関連していることを突きとめる。④ハイデッガーと関係のあったユダヤ人思想家たち(H・コーヘン、E・レヴィナス等)を参照することで、反ユダヤ主義とされる「黒ノート」のユダヤ論が、むしろ彼らのユダヤ思想を批判的に補完しうるものであることを示す。

個人研究

シュティフターとシュトルムの 文学における「障がい児」像

研究代表者・任期制講師 藤原 美沙
(ドイツ文学)

本研究は、ドイツ語圏詩的リアリズムの作家アーデルベルト・シュティフターとテオドア・シュトルムの文学に登場する「障がい児」像を考察することで、ドイツロマン主義から詩的リアリズムにかけての「子ども」像の連続性を明らかにすることを目的としている。

ロマン主義的「子ども」像は、子どもの無垢な様子や純朴な性質を宗教性と結びつけて、「神聖な」あるいは「人類の黄金期」を体現するものとして捉える文学表象である。その、詩的リアリズムにおける受容と発展については、例えば、シュトルム文学に見られる幼年期回顧のロマン主義的傾向を考察するH. Detering (2011)や、シュティフター、ケラー、シュトルムの文学に、主体性をもつ「子ども」が明確にあらわれていく様を追ったS. Susteck (2010)の論考など、近年盛んに取り組まれている。

しかし、H. Cunningham (2005)が社会学的観点から示すように、社会性を捨棄した「子ども」礼賛によって不可視化される、現実の子どもの実状があることも常に視野に入れておく必要がある。理想と現実のあいだに生じるねじれが、詩的リアリズムにおいては「子ども」の「障がい」として可視化されていることについては、これまで等閑に付されてきた。しかし、シュティフターとシュトルムの文学では、自然や動物と共鳴し、時には預言者のような言葉を用いる「障がい児」たちがとりわけ存在感を放っている。ロマン主義的「子ども」像の特徴とも重なる彼らの異質性は、身体的・精神的な「障がい」に起因するものとして描かれるが、従来の研究では、こうした「障がい」を親の「罪」のあらわれと見なすにとどまっていた。したがって、本研究では、ロマン主義への憧憬と諦念のねじれを両作家の「障がい児」像に見出し、さらに、該当期の社会における問題意識(「人間と動物」,「家庭における愛情と不和」など)がそこに反映されることで、文学作品としての多層性がうみだされていることを明らかにしていく。

参考文献

Detering, Heinrich: Kindheitsspuren. Theodor Storm und das Ende der Romantik. [Heide] (Boyens) 2011.
Susteck, Sebastian: Kinderlieben. Studien zum Wissen des 19. Jahrhunderts und zum deutschsprachigen Realismus von Stifter, Keller, Storm und anderen. Berlin; New York (De Gruyter) 2010.
Cunningham, Hugh: Children and childhood in western society since 1500. London; New York (Longman) 1995. (邦訳: ヒュー・カニンガム (北本正章訳): 概説子ども観の社会史——ヨーロッパとアメリカにみる教育・福祉・国家 (新曜社) 2013。)

共同研究

モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究

研究代表者・教授 松川 節
(モンゴル学)

2015年6月に新たに世界文化遺産に登録されたモンゴル国の「大ブルカン・カルドゥン山」に関わる祭祀文献・考古遺物の研究・分析を行い、さらに周辺の「神聖な景観」であるバレーヴェン寺院・アラシャーンハダ岩壁銘文の調査・研究及び保存・保護策の立案を、日本とモンゴルの歴史学・考古学・仏教学・民族学・保存科学の研究者が学融合的・国際協働的に行い、この景観遺産を13～17世紀モンゴル宗教文化史上に位置付けることを目的とする。

〈大ブルカン・カルドゥン山の山岳祭祀の研究と文化遺産保存保護に向けての提案〉 1. モンゴルの山岳祭祀の体系において「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」遺産が有する歴史学的・宗教学的意義を明らかにする。2. 同遺産景観の3Dドキュメンテーションを行い、保存保護のための基礎データを提供する。3. 2013年に世界遺産に登録された「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」を比較対象とし、信仰の対象としての祭祀遺産の意義について研究することによって、その保存保護に向けて実効的提案を行うとともに、暫定リストの「周辺の祭祀景観」のうちバレーヴェン寺院とアラシャーンハダ遺蹟の正式登録を支援する研究を行う。

〈祭祀文書研究〉 1. モンゴル国ボルガン県のハルボハ寺院址から出土したモンゴル語・チベット語祭祀文書・考古遺物を考古学的、歴史学的、保存科学的な面から調査・解読・研究し、その来歴及び年代を比定するための基礎データを抽出する。2. 同様に、祭祀文書におけるモンゴル口承文芸の要素、チベット仏教文学の影響、チベット語文書の解読研究をそれぞれ行う。

2016年度は、2回の国内研究会の開催と、「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」遺産の研究基盤を構築し、世界遺産富士山との比較研究を行うことをめざす。

共同研究

ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究

研究代表者・准教授 上田 敏樹
(情報工学)

人文情報学科ではICT端末の教育上の実用的なモデルを確立するため、2011年度よりタブレット端末(iPad)を導入し、BYODとしての効果について検証してきた。また、大学内におけるICT環境はネットワーク環境としてインターネットやWi-Fiが、端末としてはタブレット端末やスマートフォンが普及しているが、今後はウェアラブル端末の普及が予想される。国内外のメーカーからメガネ型、リストバンド型などが発売されているが、ビッグデータ、IoTなどの観点からも更なる利用の促進が予想され、使いやすく、また、様々なデータの取得が行える端末の登場が期待されている。

一方、人文情報学科における講義においては、学習管理システムとしてMoodleの利用を2014年度から始めており学生のアクセス履歴解析のためのデータが蓄積されている。このMoodleへは学外からのアクセスも可能であるため、学生はe-ラーニングあるいはアクティブ・ラーニングとしてのフレームワークとしても活用している。

このようなICT環境の整備および学習履歴の蓄積を背景として、ウェアラブル端末やスマートフォンから得られた学生のバイタルデータ(心拍数、消費カロリー、睡眠データ、視線の移動、頭の動き)やライフログ(移動距離、ルートの行動履歴)と学生の身体状態およびMoodleアクセスにより得られた学習行動ロ

グとの相関関係をHadoopの高速処理技術を適用したクラスタリング手法などにより見出す研究を実施する。

また、その解析結果を学生が持つタブレット端末にリアルタイムにフィードバックすることにより、学生の学習意欲を喚起する方策について研究する。

従来の研究では実験室環境でしか利用できない装置や学生が教室内で実際に装着することは困難であると判断される装置の利用によるデータ取得が行われているが、本研究では実際に利用することを見据え、今後普及が予想され教室で利用される一般的なICT端末を用いることに特徴がある。また、教室外での利用シーンも考えた実用化も目標とする。

個人研究

再犯リスク低減と更生の基盤づくりを目指したピアサポート活動の試行的実践とその評価

研究代表者・教授 脇中 洋
(発達心理学・法心理学)

本研究(科研費基盤研究(C)H28～H31課題番号16K03379)は、再犯リスクを抱え知的障害が疑われる受刑者/矯正施設退所者に対する更生を図る支援活動として、矯正施設と退所後の双方にわたるピアサポート型な支援活動を実践し、プログラム内容を練成しながらその評価を行うものである。これらの最終的効果(地域での安定的生活)の確認には数年を要すると見込まれるが、本研究では当初2年間に矯正施設内における効果検証と、退所後のピアサポート活動の試行的実践を進め、その後の2年間で当事者の縦断的な効果検証や、カナダ、ノルウェーの更生保護との比較検討を行い、ピアサポート型な更生支援が達成できるエッセンスや諸条件を明らかにする。対象者は知的障害があるか、またはそれに準じて何らかの支援を受けることによって能力を発揮し、社会復帰が見込まれる受刑者または退所者とする。

具体的には、以下の3点を目的とする。(1)播磨社会復帰促進センターにおけるクラウニング講座の効果検証のうち特にピアサポート型な側面を分析する。(2)矯正施設退所者が利用する京都更生保護会においてピアサポーター養成の試行的実践とプログラムの錬成を行う。(3)カナダ・ヴィクトリア(Bill

Mudge House)およびノルウェー・オスロ(Way Back Oslo)のハーフウェイハウスにおける更生保護事業との比較検討を行う。また、これらの調査や実践的活動の中で出会って了解を取ることができた当事者に対して、可能な範囲で縦断的な経過事例を記録するとともに、関係する矯正施設や障害者施設の職員による評価を記録する。

以上の研究活動を通じて、知的障害のある受刑者が犯罪からの離脱を達成する上での、ピアサポート型な支援活動の有効性を明らかにしようとするものである。

個人研究

ジャイナ教の死生観に関する基礎的研究 —断食死儀礼の規定を中心として

研究代表者・特別研究員 堀田 和義
(インド哲学(ジャイナ教)・死生学)

古来より、ジャイナ教では、自ら食を断って死を迎える断食死が理想的な死に方とされてきた。そしてこの断食死は、出家修行者だけでなく、在家信者にも推奨されてきた。断食死は、現代でも主として出家修行者により実践されることがある。

「ジャイナ教の死生観に関する基礎的研究—断食死儀礼の規定を中心として」と題する本研究では、ジャイナ教における断食死の中でも、在家信者による断食死の解明を目的としている。ジャイナ教在家信者の行動規範については、「シュラーヴァカ・アーチャーラ文献」と呼ばれる文献群があり、これらの文献では、在家信者が守るべき誓戒、あるいはそれに付随するものとして、断食死に関する規定が記されている。本研究では、これらの記述を分析することによって、ジャイナ教在家信者の断食死儀礼の解明を試みる。

まずは、ジャイナ教在家信者の行動規範における断食死の位置付けや実践に関する基本的な規定を解明する。そのうえで、古くからある「断食死は自殺に相当する」という批判に対するジャイナ教徒からの反論を分析する。この論争は、いまだに決着がついておらず、現代でも司法関係者などからの批判がニュースとなる。本研究では、断食死と自殺とが相違することを主張するジャイナ教徒の見解を抽出・分析することで、どのような方法で断食死と自殺との差別化が図られて

いるのかという点を解明する。

資料となるシュラーヴァカ・アーチャーラ文献に関しては、現在60種類ほどの文献を入手済みであるが、インドに写本の状態で眠っているものも数多くあると考えられる。そのため、未出版の文献の写本に関する調査も並行して行う。また、シュラーヴァカ・アーチャーラ文献はいわゆる「古典」ではなく、現在進行形で増え続けているため、現代語で著された文献に関する調査もインド国内において行い、将来的な全容解明のための土台を築くことを目的としている。

個人研究

『苔の衣』諸伝本の本文研究 及び校本作成

研究代表者・任期制助教 関本 真乃
(国文学)

仁治3年(1242)に後嵯峨院が即位し文永9年(1272)に没するまでの約30年間は、一般的に後嵯峨院時代と称される。『勅撰和歌集』『続後撰和歌集』、『続古今和歌集』が編まれたほか、多くの文学作品が成立し『源氏』の「御談義」がなされるなど、近年文化的にも注目が高まっている時代である。この時代に成立したとされる作り物語『苔の衣』には、散逸したものが多い中世の作り物語の中において、現在判明しているところで29本と比較的多くの伝本(写本)が現存する。諸伝本は、現在A前田家尊經閣本系統・B穂久邇文庫本系統のいずれかに分類されるが、具体的な本文調査・研究はすすんでおらず、校本も作成されていない。加えて、B穂久邇文庫本系統の諸本には、秋巻のみの零本の中に「宇治物語」「宇治大納言物語」と号するものがあり、なぜこのような享受がなされたのかも併せて解決されるべき課題である。

本研究の目的は、この『苔の衣』諸伝本に関する書誌・本文調査を実施し、諸本の関係について従来の通説を見直して分類し、どのような書写・享受過程を経て現存する『苔の衣』諸本本文が形成されたのかを総合的に明らかにすることである。

まず、A・Bいずれの系統に属するのか明らかでない6本について、諸本本文を実見し、書誌調査を行うとともに、写真版や複写を入手する。入手した資料を用い、各本文を翻訳し電子テキストデータ化する。得られた本文を集約し、比較検討して分析する。

そののち、B系統、A系統の諸本調査を順次すすめ諸本本文の形成過程を考察し、系統図を作成するとともに原態に最も近い善本を探り、秋巻のみが独立して流布した理由の解明を目指す。

また、収集した本文については、各系統につき諸本を校合した校本を作成し、以後の『苔の衣』研究に役立てる予定である。

個人研究

キリスト教聖書の翻訳にみられる 現地語語彙の選択とローカル社会 の再編：タイとミャンマーにおけ るプロテスタント派カレン民族の 事例から

研究代表者・PD 研究員 田崎 郁子
(文化人類学)

東南アジアでは、欧米の植民地主義の拡大とともに19世紀以降キリスト教宣教が進み、キリスト教は特に国民国家を形成する主要民族とは異なるマイノリティの社会において重要な要素となってきた。そのため人類学的な先行研究では、キリスト教化とマイノリティの境界保持あるいはアイデンティティが主なテーマとされることが多く、改宗が民族的差異の強調につながるということが指摘されてきた。そのため、カレンも含めた東南アジア大陸部山地のマイノリティに関しては、その民族意識の形成においてキリスト教宣教が果たした役割の大きさを指摘する先行研究が多い一方で、このような見方はマジョリティへの抵抗の主体として一面的にカレンを捉えることにつながってしまう。

さて、プロテスタントは個人による内面の信仰を主張するため、土着の言語や表現を重んじ、聖書の現地語翻訳や現地語による福音伝道に熱心である。翻訳によって福音メッセージは土着の信仰の中に埋め込まれ、新しい言説や解釈が形成される。そのため、プロテスタントの受容に際しては、言語のもつ作用に着目することが重要である。

そこで本研究では、改宗後既に2-3世代以上が経過したキリスト教徒カレンを対象に、エスニシティや教義といった側面ではなく、プロテスタントに顕著に見られる言語表現とその日常生活における作用に着目し、キリスト教受容とローカル社会の再編について考

察する。まず、資料から聖書の現地語翻訳によって起こる独特な言葉遣いの形成を明らかにし、次にそれによる日常生活や社会の再編過程をフィールド調査から示す。そして、キリスト教が長期にわたって存在する地域では、聖書の現地語翻訳や教会活動を通して選択された言葉遣いの強調が、先行研究で指摘されてきた近代的主体化や民族アイデンティティの強調とは異なる方法で、ローカル社会の日常生活を再編する可能性について論じる。

個人研究

現存大蔵経諸本をもちいた 〈阿闍世王経〉漢訳諸本に関する 文献学的研究

研究代表者・任期制助教 宮崎 展昌
(仏教学)

およそ90年前に本邦において刊行が始められた『大正新脩大蔵経』（大正蔵）は、漢語仏典を扱う際に、国際的にも標準的典拠とされてきたが、近年の研究や環境の変化によって、大正蔵を批判的に研究することが可能かつ必要になってきている。すなわち、漢語大蔵経諸本の一次資料へのアクセスが比較的容易になるとともに、大正蔵の抱える、様々な問題点が指摘されるようになってきた。そこで、本研究では、日本に伝わる古写経を含む、現在入手可能な漢語大蔵経諸本をできる限りもちいて、〈阿闍世王経〉の漢訳3種について、批判校訂本の作成ならびに大蔵経諸本の系統を分析することを主たる研究目的とする。それらによって、研究代表者がこれまで取り組んできた、〈阿闍世王経〉に関する文献学的研究の拡充を図るとともに、漢語大蔵経研究の事例研究のひとつを提供することを目指す。

具体的な研究方法については、(a) 支婁迦讖訳『阿闍世王経』および (b) 竺法護訳『普超三昧経』、そして (c) 部分訳である失訳『放鉢経』の、3種の〈阿闍世王経〉の漢訳典籍を研究対象とする。研究の手順としては、準備的段階として、可能な限り、大蔵経諸資料の収集を図ると同時に、XML/TEIを活用した形で、それらのテキストデータを作成する。次に、上記漢訳経典それぞれに関して、収集・閲覧できた諸資料を校合して異読情報を整理・分析し、批判校訂本の作成を試みるとともに、大蔵経諸本の系統について考察

する。さらに、研究代表者がこれまでに作成してきた〈阿闍世王経〉チベット語訳の批判校訂本およびそれにもとづく日本語訳注研究とあわせるかたちで、上記研究成果を公表・出版する準備も進めていく。

個人研究

キンギョを用いた質感の進化的 起源の検討

研究代表者・講師 高橋 真
(比較認知科学)

外界の情報は感覚器により入力され、脳内において処理されることで認識される。外界から情報を得た感覚のモダリティは一つであっても、別のモダリティの情報と統合され処理されることがある。このようなモダリティ間の連合によって生じる認識には言語が媒介とされるため、ヒト固有の現象と考えられてきた。しかし、先行研究により、ヒト・ネズミ目（ラット・ハムスター）・キンギョが視覚的なノイズと聴覚的なノイズの共通性を認識している可能性が示唆されている。したがって、この処理は必ずしも言語を媒介とする必要がない可能性がある。

この共通性の基盤として質感のような主観的体験が媒介している可能性がある。すなわち、ヒトの質感の進化的起源が魚類までさかのぼることが可能かもしれない。ただし、主観的体験は言語で表されるため、ヒト以外の動物での研究は難しい。しかし、ヒト言語を持たない動物の主観的体験を示す可能性を持つ手法として、刺激自体に対する快・不快を強化子として行動を形成する感覚性強化がある。感覚性強化は、当該の動物が快感情を生起する刺激自体を強化子とする条件付けによる学習の手法の一つである。質感に心地よさといった情報が関わる以上、ヒト以外の種がヒトと同様に質感を感じているならば、その刺激を強化子として行動形成ができるはずである。

そこで本研究では、キンギョに対して感覚性強化手続きによる行動形成が可能かどうかを検証することで、ヒトが質感を感じる刺激に対してキンギョが快不快を感じているかどうかを調べる。それにより、質感の進化的起源が魚類まで遡れるかどうかを調べる。

学術交流協定に基づく共同研究

共同研究報告会の開催報告 －モンゴル国立大学を訪問して－

西藏文献研究 嘱託研究員・准教授 武田 和哉

本研究所とモンゴル国立大学社会科学部（現在は総合科学学部と改称）との学術交流協定に基づく共同研究活動は2015年度で3ヵ年計画の最終年度を迎えた。

当事業を担当している西藏文献研究班では、共同研究成果の取りまとめ作業を行うとともに、その一環で昨年11月5～8日にモンゴル国を訪問し、11月7日にはウランバートル市内にあるモンゴル国立大学において「13～17世紀モンゴル仏教寺院の研究」というテーマにて共同研究報告会を開催した。

参加および報告者は、松川節（真宗総合研究所長）と三宅伸一郎・武田和哉（ともに研究員）の3名である。

当日は、モンゴル国立大学関係者をはじめとして、現地の研究機関の研究者や仏教団体関係者など、延べ20名以上のご参加があった。以下に、当日の報告者および報告内容を記す。

1. A. オチル「17世紀北モンゴルで建立された若干の寺院の建築様式について」
2. 三宅伸一郎「ケンチェン・バンディタ=イシ・バルデンによるモンゴルの王統と仏教史について」
3. P. デルゲルジャルガル「モンゴル仏教寺院で規範とされていた若干の寺規について」
4. N. アムガラ「新発見の一寺規」
5. U. エルデネバト「カラコルムにおける「興元閣」の考古学的研究」

6. 武田和哉「モンゴル国ドルノド県ヘルレン・バルス・ホト所在磚積八角仏塔に関する調査所見および一考察」
7. M. ガントヤー「16～17世紀の境界においてモンゴル人が仏教に対峙した特徴（研究概要より）」
8. 松川節「モンゴル国立大学・大谷大学共同“後伝期モンゴル仏教の寺院”プロジェクト2013～2015年度研究成果より」

報告に続く総合討論では、仏教学・宗教学・歴史学・考古学の学問領域の枠を超えて、闊達な討論や意見交換が行われ、実りある学術交流の場となった。さらに、共同研究会の終了後は、ウランバートル市内にてモンゴル国立大学主催の懇親会が開かれ、ここでも参加者による交流・懇親等の活動が続いた。

なお、今回の報告会の席上、モンゴル側からは過去3ヵ年にわたる共同研究活動について高く評価する旨の表明があった。関係者間での意見交換の結果、現在の協力協定を延長する方向で検討を始めることで合意した。その後協議を継続して行い、2016年度から再度3ヵ年の計画で、第Ⅱ期の共同研究と学術交流の諸活動等を行うことで合意し、2016年3月に調印を行うに到った。

このほか、2013-15年度の第Ⅰ期共同研究に関する成果報告書は、2016年度内に編集・刊行がなされる計画となっている。



共同研究報告会の状況



共同研究の成果と意義について総括をする松川所長

海外研究調査報告

北部ベトナムにおける主要寺院と東洋学研究の 現状に関する調査報告

ベトナム仏教研究 研究代表者・教授 織田 顕祐

2016年3月21日(月)から26日(土)の日程で、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究の確認、およびハノイ周辺の重要寺院の現地調査、ハノイ市内の有力大学における東洋学研究の実際を把握するため、研究代表者織田顕祐と研究員箕浦暁雄の両名が海外調査を実施した。以下にその概要を報告する。

○宗教研究院では、トゥアン院長をはじめとして忌憚のない意見交換を持つことができたが、内容は細部にわたるのでここでは省略する。なお以下の調査は、宗教研究院側の周到な準備と協力によって実現したものである。

○寺院調査について—ハノイ市内の5寺院について
・安富（イエンフー）寺は、後漢時代に建立されたとする伝説を持つ寺院。後に道教と習合し、「青童官」（男性の霊媒の官職名）について触れる碑文が知られる。
・曹冊（ターオサク）寺は、「19世紀に華厳会を実施していた」という情報の確認のために訪問したが、実際は華厳会がターオサク寺の修復に相当の寄付をしたという内容であった。いずれにしてもベトナム北部に禅宗に源を発する華厳文化があったことは確認できた。また同寺の正式名称が「霊山寺」であることも碑文によって確認した。

・西芳（タイフォン）寺 正式名称は崇福寺といい、ハノイの南西のタイフォン山（旧名カウラウ 句漏）と称する小高い山上にある。中国の神仙思想を体系化した葛洪（283～343頃）がこの地で修行したという伝説がある。唐代の建立と伝えるが、「西方山崇福寺碑」によって1632年に大規模な修築を行ったことが確認できるのみである。寺院構造は、上堂・中堂・下堂が別々に三字形に配置されるのが他のベトナム寺院と大きく異なる。後黎朝の永祐年間（1735～1740）に、現存する多くの仏像などが造られたようで、ベトナム仏教美術史上重要な寺院である。

・宮（ミア）寺 ドゥオンラム村のドンサン集落にある。「ミア」はサトウキビのことで、周辺の特産のようである。正式名は崇巖（スングエム）寺という。塑像（粘土）または木造の多くの仏像を安置している。

また洞窟様の祭壇が何体も見られ、大西氏の考えでは「洞天福地思想」という道教の世界観と混淆しているのではないかとのこと。一見すると、法隆寺五重塔の「塔本四具足」の背後の山の表現とよく似ているが、歴史的にも地域的にも全く異なるために詳しい検討が必要である。

・貝溪（ボイケイ）寺 貝溪は地名で、正式名は大悲寺と言う。「菩薩神人」という仏教道教習合の本尊を有しており、ベトナム仏教共通の過去現在未来の三聖が存在しない。仏殿の最奥に観音菩薩が安置され、その背後の別殿に菩薩神人がまつられている。また本尊須弥壇には「昌符六年（1382）」と刻されており、チャン朝後期であることが確認できた。

○ハイゾン省・バクニン省の3寺院について

・洞午寺（ドンゴ寺、ハイゾン省） 正式名称は「靈応寺」という。ベトナム北部の竹林派を再興した真源（1647-1727）開創の寺院。「九品蓮華塔」は、いわゆる浄土教と禅宗が習合した信仰形態を示す。祖師堂に隣接して聖母堂（道教の女神の名）があり道教とも習合している。

・鑿寺（ザーム寺、ハイゾン省錦江（カムザム）県） 扁額により「巖光禪寺」が正式名称と思われる。ここにも「九品蓮華塔」があり、国家宝物に指定されているが寺の歴史や塔の由緒等はまだまだよく分かっていない。

・筆塔寺（ブツブ寺、バクニン省） 寺内の「寧福禪寺三宝祭礼田碑」（寧福寺の三宝供養のために田を寄進したことを記す石碑）により、明行が徳隆五年（1633）に広西から来越してこの寺を開いたことが知られる。仏像の雄品が多いことで知られ、特に「張先生奉刻」と刻された1656年製作の千手観音は、ベトナム仏教美術の最高傑作とされる。また、内陣形式が一般のベトナム寺院と異なっており、阿弥陀・釈迦・弥勒の三聖が前後二重にある。奥と手前では異なる脇侍を備えており、奥の三聖の左脇侍は「雪山釈迦像」と記された苦行像で、本尊の釈迦像とは全く異なった造形表現である。



筆塔（ブツタ）寺の千手観音像

○ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学訪問

Pham Thi Thu Giang（ファン ティ トウ ザン）先生を訪問する。同先生は、「僧侶の肉食妻帯」に関心を持ち、日本に渡って西本願寺の西吟（さいぎん）を研究し、奈良女子大学から日本仏教の研究により博士を授与された。したがって、大谷大学へもこれまでしばしば訪問されたそうで、今後は一層の交流を深めたいとのことであった。宗教研究院との共同研究の目的や現状を一通り説明し、是非協力を頂きたい旨申し上げたところ快諾された。ザン先生の方でも東洋学部の現状や、授業の方法論などでさまざまな課題を抱えており、是非協力を頂きたいとのことであった。

以上が今回調査のほぼ概要である。

カナダの更生保護と刑事手続き実態調査報告

2015年度一般研究 研究代表者・教授 脇中 洋

2015年度一般研究「触法知的障害者に対するピアサポート型な更生支援活動の実践とその評価」の調査活動の一環として、2016年3月4日(金)から3月13日(日)までカナダBC州ヴィクトリアの被疑者取調べと更生保護の調査を行った。

3月4日にバンクーバー経由でヴィクトリア市に入り、翌5日にヴィクトリア市内に3か所あるハーフウェイハウスの一つであるビルマッジハウスを訪問した。カナダの刑務所はセキュリティレベルに応じて大きく3段階に分かれており、仮出所が許可されるとハーフウェイハウスに居住しながら仕事を探すなどして過ごすことになる。ここでは1日2回の点呼確認をはじめ、出所者ごとにいくつかの遵守事項が設定されており、これに違反すると刑務所に逆戻りしなくてはならない。日本の更生保護施設に類似しているが、日本では仮出所率が低く満期出所者が数多くいるのに対して、彼の地ではできるだけ仮出所を促して社会内処

遇を図っている。

ビルマッジハウスの特徴は、食事に関しては無条件に豊富に用意しており、そのための専属の調理人が2



Bill Mudge House 外観

人いる。安全と安心を確保することが、新たに生きなおす出所者にとって必要不可欠であるとは、ビルマッジハウスの施設長の弁である。だが3年前にここを訪れた際に知り合った2件の元殺人犯のデイクは、日中の外出時にドラッグを体験したことが発覚し、再び本土（ヴィクトリアはバンクーバー島にある）の刑務所に戻ってしまっていた。このハーフウェイハウスの職員は男女合わせて延べ16名おり、利用者の定員は男子11名という。すべてが個室というわけではなかったので、増築を申請して別棟（地下室を合わせて木造3階建て）を建築中であった。近隣住民との話し合いで、性的犯罪の加害者は受け入れられないことになっているほか、増築にあたって窓枠の位置に至るまで合意がないと建築許可が下りないとのことだった。

3月7日は、午後からヴィクトリア脳損傷協会ケースマネージャー・アレックスの迎えでカウチャンペイに住む彼の母親宅へ招待された。8日は、仮出所事務所元職員ステファニー、ビルマッジハウス職員玉緒と面会し、その後BC博物館職員のエリックの案内でネイティブカナディアン言語文化について情報収集した。BC州にはファースト・ネーションズの部族が数多くあり、言語も34種あるという。9日午前、ヴィクトリア警察にて、殺人や麻薬の組織犯罪に取り組むマーク・カッター刑事と面会し、取調べ手法研修の資

料を入手した。午後からもう一つのハーフウェイハウスであるマンチェスターハウスを訪問の後、ヴィクトリア脳損傷協会（VBIS）を訪問してピアサポーター達と懇談した。ここでVBISスタッフのリディが、明朝デイク受刑者が、刑務官が帯同するものの、VBISで毎週行っているストレスマネジメントクラスを受講にやってくるという情報を伝えてくれたため、10日にVBISを再訪し、デイクが教室から出てくるところで会うことができた。帯同している女性刑務官から写真撮影は許可されなかったものの、ハグして短い会話を交わすことができた。この夏には出所してビルマッジハウスに入れる見込みとのこと。すぐにカナダ政府の乗用車に乗ってウィリアムヘッド刑務所へと帰って行った。それにしても収監中にも関わらず、たった一人の受刑者が心理教育プログラムを受講するために刑務所から1時間以上かけて送迎するカナダ政府の矯正システムには少々驚かされた。

11日は、レンタカーを借りて、ネイティブの人たちが多く暮らしているヴィクトリア市北西の町ダンカン、シュメイナスを訪れ、犯罪率の高いと言われるネイティブの言語文化、福祉教育や就労支援施策についての調査も行うことができ、12日に帰途に就いて13日午後には帰国した。

調査旅行（ACM IUI 2016 3/7 – 10 Sonoma, California）報告

2015年度一般研究 研究代表者・准教授 酒井 恵光

はじめに

去る3月7日～10日にThe Lodge at Sonoma Renaissance Report & Spa（米国カリフォルニア州ソノマ郡）を会場に開催された国際会議ACM IUI 2016への参加を主目的とした調査旅行を行ってきたので、本稿ではそれについて報告する。

ACM IUI について

IUI (Intelligent User Interface) はコンピュータサイエンス分野の有力な学会であるACM (Association for Computer Machinery) が主催するユーザインターフェイス分野の国際会議である。その名の通り、人工知能をはじめとする先進技術を適用したユーザイン



IUI2016 会場外観

ターフェイスに関する発表が行われている。

本研究班では「情報検索分野を中心とした、可視化技法の応用に関する研究」を研究テーマとしている。情報の可視化はユーザインターフェイスの中心的分野のひとつであり、IUIにおいても“Intelligent Visualization”のセッションが立てられている。

今回の調査旅行は、可視化を中心とした、ユーザインターフェイス領域の研究動向を把握するとともに、各国の研究者と接触を持つことを目的としたものである。

コンピュータ歴史博物館訪問について

IUI 2016参加前日をサンフランシスコ国際空港から現地への移動及び準備にあてたが、若干の時間的余裕があったため、マウンテンビュー市にあるコンピュータ歴史博物館を訪問した。この施設は、技術史上貴重な資料を多数収蔵しており、ここへの訪問はコンピュータ技術に関する理解と、コンピュータ教育の両方の観点から重要な価値がある。

ここでは、IBM1401、IBM360、PDP-8、Cray-1、Altair8800などの歴史上重要なコンピュータの実機のほか、シッカートの作った世界初の計算機や、バベッジの階差機関、ホレリスのパンチカード解析機、ENIACといった、計算機史上重要な装置のレプリカなども展示されていた。これらの展示は、今後の研究・教育両面に活用されることが期待される。

今回の調査旅行での成果

IUI 2016においては、“Social Media”、“User Modelling”、“Intelligent Visualization”、“Personalization”、“IUI for Entertainment and Health”、“Recommender Systems”、“Wearable and Mobile IUI”、“Information Retrieval



コンピュータ歴史博物館の IBM 1401 の展示

and Search”、“IUI for Education and Training”の各セッションが開かれた。

セッション名として、本研究班と直接関連するのは“Intelligent Visualization”と“Information Retrieval and Search”だが、他のセッションにおいても本研究班のテーマと関連する内容に多く触れることができ、良い刺激を受けることができた。

また、最終日（3/10）にはワークショップとチュートリアルが行われ、これも興味深い内容であった。2日目のセッション終了後、開催地のホテルにおいてディナーが開かれた。この会においては、各国から参加した諸分野の研究者と交流を行うことができ、こちらも非常に実りの多い会であった。

今回の調査旅行は、本研究班のテーマに大きく寄与し、そこから派生する研究にもつながることが期待される。

あわせて、今回の会議への参加を支援いただいた真宗総合研究所に深く感謝したい。

国内研究調査報告

教如上人関係史料調査報告

教如上人研究 研究員・講師 川端 泰幸

2015年度後期、教如上人研究班では2回の史料調査を実施した。いずれも研究課題である教如上人関連史料を所蔵する寺院に赴いての調査である。

【岡崎別院調査 2016年2月22日(月)】

まず、2016年2月22日(月)に、京都市左京区岡崎にある真宗大谷派岡崎別院において、調査を行った。岡崎別院そのものは、東本願寺第20代・達如上人が19世紀初頭に創建した別院であるが、さまざまな経緯によって多くの古文書や法宝物を今に伝えている。調査では、教如上人御影と教如上人消息の写本、およびその他の法宝物類の調査を実施した。教如上人御影は、安政3年(1856)9月に達如上人より授与されたもので、大紋高麗縁の上畳に座し、緋色の色衣に同色・八藤紋の五条袷姿を着し、僧綱襟をつけて右手に桧扇、左手に念珠を持つ姿で描かれる。これまでの調査例からも、別院などには色衣の門主影像が授与されていることが判明しており、岡崎別院においても同様の事情が見取れる。また消息の写しは、「洛中洛外志衆中」に教如上人が宛てたもので、石山合戦講和ののち大坂本願寺を退出した教如上人が、これまで自身を支援してくれた門徒たちに謝意を表したものである。原本は破損しないよう本山に納め、そのかわりに慶応元年(1865)、第二十一代・巖如上人が写したのが本品であると奥書が記されている。その他にも第二十三代・彰如上人の墨蹟など数多くの法宝物があり、岡崎別院所蔵資料の全体像を把握することができた。

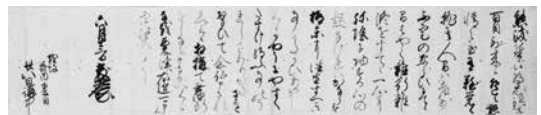


岡崎別院本堂

【本誓寺調査 2016年3月5日(土)～7日(月)】

2016年3月5日(土)～7日(月)にかけて、新潟県上越市にある真宗大谷派本誓寺において調査を行った。この調査では、本誓寺所蔵史料の全体点数を把握するとともに、各史料に名称・番号を付すことを主たる内容として作業を進めた。初日から2日目午前中にかけては、各史料を開き、状態を点検しつつ、名称・番号を付した。さらに、その作業が完了したものを順次、法量や詳細な情報などを調書にとり、写真撮影にも着手した。

この調査によって、本誓寺史料には教如上人関係の史料が多数伝存していること、また上杉氏や武田氏などの戦国大名関係文書、親鸞聖人のお骨と伝えるもの、その他多数の文化財が伝存しており、教如上人研究班としてはもちろんのことながら、上越地域の文化・歴史においても、また宗教史・歴史・真宗史などさまざまな方面において非常に重要な法宝物類であることを確認した。



教如上人消息

〔付記〕 いずれの調査も、各寺院・ご門徒の皆さまのご理解と全面的な協力のもと行うことができたものである。厚く御礼を申し上げます。

長徳寺蔵清沢満之関連資料の調査報告

清沢満之研究 研究代表者・准教授 藤原 正寿

清沢満之研究班では『清沢満之全集』（岩波書店）の補遺刊行に向けた研究活動の一環として、昨年度より継続している関根仁應氏の自坊（長徳寺）所蔵の書簡、講義録等の資料調査を2016年3月23日（木）から24日（木）の二日間にわたって実施した。長徳寺では昨年度の二度の出張において、関根仁應氏筆録の清沢満之講義録、計五点の撮影を行っており、現在はその翻刻作業が終わり、第一次校正まで進んでいるため、その進捗状況の報告も合せて行った。以下はその詳細である。

今回の出張は研究代表者の藤原正寿、研究員の西本祐攝、研究補助員の村上良顕、研究補助者の百武涼子の計四名での研究調査となった。当日はまず、長徳寺現住職の関根正隆氏に第一次校正済み講義録の印刷物をお渡しし、現状報告及び出版に向けた相談を行った。関根氏には講義録出版に対する理解をいただいております。今後は具体的な出版に向けた契約を結ぶなどの手続きを行うと共に、引き続き校正を行っていく予定で

ある。

続いて、関根仁應宛の清沢満之書簡を調査した。今回は書簡の内容までは十分に確認できなかったが、書簡類は比較的保存状態もよく、資料の撮影や翻刻などが出来るかどうかを今後探っていく必要がある。また、真宗大谷派教学研究所以から発刊されている『関根仁應日誌』の原本や当時の写真等の貴重な資料も閲覧させていただいた。

今回で長徳寺での資料調査収集は三回目となり、長徳寺関係の清沢満之に関する資料のほとんどの調査が終わった。今後は他の場所にある資料の調査・収集を進めるとともに、百武涼子氏、工藤克洋氏の協力を得ながら長徳寺蔵の資料の校正作業を進め、補遺刊行に向けた研究活動を行っていきたいと考えている。



資料調査風景



関根仁應宛清沢満之書簡

寺本婉雅関係宗林寺・村岡家資料の返却

西藏文献研究 研究代表者・准教授 三宅 伸一郎

日本人として1899年に初めてチベットに足を踏み入れ、後、大谷大学教授となり、本学におけるチベット研究の基礎を築いた寺本婉雅（1872-1940）に関する資料が、村岡家（滋賀県竜王町）および宗林寺（富山県南砺市城端）に所蔵されていることを知ったのは、今から9年前、2006年のことであった。木場明志先生（当時本学教授）を中心とするグループによって、城端別院より「佛巖寺・寺本婉雅」との墨書のある「義和団兵服」が発見されたことに端を発する。後、当時本学博物館に勤務されていた上林直子氏により、この「佛巖寺」が、滋賀県竜王町にあると確認され、同寺を訪問した際、同席しておられた村岡家の方より資料の存在をお聞きし、日を改めて同家を訪問し、日記や書簡を始めとする貴重な資料の数々を初めて拝見した。

宗林寺所蔵資料については、木場先生より「城端の宗林寺に寺本に関する資料が所蔵されているらしい」とのお話を聞き、先生が研究代表を務めていた真宗総合研究所真宗本廟造営史研究による城端での調査に同行させていただき同寺を訪問した際、資料の存在を確認した。後、西藏文献研究班のメンバーで宗林寺を再訪し、寺本婉雅旧蔵のチベット語文献をはじめとする資料の調査と写真撮影をおこなった。

寺本婉雅はこれまで、十分に評価されてきたと言いつてもいい。その原因は、『蔵蒙旅日記』（横地祥原編、芙蓉書房、1974年）がまとまった唯一のものという、資料の少なさによるものであった。村岡家および宗林寺に所蔵される資料は、こうした状況を打開する可能性を持っていた。そこで、今後の研究のため、村岡家および宗林寺に資料の借用をお願いしたところ、御快諾をいただいた。以上のような経緯で2007年に資料を借用して以来、西藏文献研究班では資料の整理と研究をおこない、2012年度からは高本康子氏を嘱託研究員にお迎えし、日記の翻刻（高本康子・三宅伸一郎「寺本婉雅日記『新旧年月事記』翻刻」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』31、2014年、pp.143-186）など幾つかの成果を発表してきた。ただ、借用から8年と言う長い歳月が経過しているため、2015年度中に資料全体に対する総合的な研究をとりまとめた上で、全資料を一旦返却することとなった。2015年8月3日(月)から7日(金)には、集中的に資料全体の調査・点検・撮影をお

こない、全資料に対する目録を完成させることができた。また、研究所関係各位のご厚意により、保管用の紙製の箱を作成していただくことができた。

村岡家には2016年3月12日(土)、宗林寺には同3月28日(月)に資料返却のためお伺いした。まずは、長年の資料借用に対するお礼を申し上げ、完成した目録をお渡しし、資料の重要性と収納箱への収納状況をご説明した。さらに、今後の研究の進捗によっては、必要な資料の再借用のお願いに何うかもしれないこと、目録については印刷・配布を考えているので、内容に問題ないかご確認いただきたいことなどもお話した。以上の申し出に対し、村岡家・宗林寺とも好意的にご対応いただいた。

村岡家所蔵資料は、日記、書簡、直筆原稿など内容多岐にわたり、宗林寺所蔵資料は、寺本婉雅旧蔵のチベット語文献がその大半を占めるなど、内容の上でそれぞれ特色を有している。資料全体に対する総合的な評価については、稿を改めて報告する予定である。

所報第67号にて報告のとおり2015年には、寺本家にも村岡家・宗林寺所蔵資料を凌ぐ分量の書簡や未刊行の最晩年の日記、クンプム寺滞在時の研究ノートなど大量の資料が所蔵されていることがわかった。村岡家・宗林寺そして寺本家における大量の資料の発現により、寺本婉雅に対する研究は新たな段階に入ってきたと言える。本研究班としてはこれまでの研究成果をもとに、本学のチベット研究の祖である寺本婉雅に対する研究を今後も継続してゆきたいと考えている。

最後になったが、この貴重な資料を長年お貸しくださった村岡家および宗林寺に、改めて感謝の意を表したい。

公開講演会・公開研究会

公開講演会・公開研究会報告

(中国古代史及び敦煌・トルファン文書研究国際シンポジウム)

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授 井黒 忍

2015年12月19日(土)に大谷大学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所の共催にて本学の教員2名に加え、海外から4名、国内から4名の研究者を招聘し、国際シンポジウムを開催した。なお、大谷大学博物館に所蔵される敦煌文書の閲覧を行い、終了後には懇親会を行った。開会挨拶を草野顕之（本学学長・当時）、趣旨説明を松川節（本学真宗総合研究所所長）、閉会挨拶を村岡侑（龍谷大学文学部教授）が行い、総司会を井黒忍が務めた。

シンポジウムは3セッションからなり、第1セッションは「中国古代史の諸問題」、第2セッションは「敦煌・トルファン文書研究の諸相」、第3セッションは「敦煌文書研究」をテーマとした。それぞれの報告テーマは下記の通りであり、それぞれ活発な質疑応答がなされた。

まず、第1セッションでは、王震中（中国社会科学院歴史研究所副所長）「中国国家形態結構の演進と民族典型的関係（中国古代の国家構造と民族典型的関係）」および江村治樹（龍谷大学文学部教授）「中国新石器時代の都市発達をめぐる諸問題」の二報告がなされた。セッション終了後には大谷大学博物館において同博物館所蔵敦煌文書の閲覧を行った。

続く第2セッションでは、牛来穎（中国社会科学院歴史研究所魏晋南北朝隋唐史研究室研究員）「大谷馬

政文書と《厩牧令》研究－以進馬文書為切入点（大谷馬政文書と「厩牧令」の研究－進馬文書を切り口として－）、浅見直一郎（本学文学部教授）「随葬衣物疏をめぐって」、李錦綉（中国社会科学院歴史研究所中外関係史研究室主任・研究員）「“移隸葱嶺”与唐代的西域経営（“移隸葱嶺”と唐代の西域経営）」、松浦典弘（本学文学部准教授）「杏雨書屋所蔵の敦煌仏教関係文献－羽699を中心に－」、雷聞（中国社会科学院歴史研究所魏晋南北朝隋唐史研究室主任・研究員）「隋唐的郷官与老人－従大谷文書4026《郷官名簿》説起（隋唐時代の郷官と老人－大谷文書4026「郷官名簿」を起点として）」、中田裕子（龍谷大学農学部講師）「5、6世紀におけるアルタイ地方の交易拠点一回鶻路をめぐって」の六報告がなされた。

第3セッションでは、礪波護（京都大学名誉教授）「敦煌と京都の五台山」、黄正建（中国社会科学院歴史研究所研究員）「大谷占ト文書研究（之一）－兼与敦煌占ト文書比較－（大谷占ト文書の研究（その一）－敦煌占ト文書との比較を兼ねて－）」、楊宝玉（中国社会科学院歴史研究所文化史研究室・研究員）「羽032-1《駉程記》与大中五年張議譚入奏諸問題弁析（羽032-1『駉程記』と大中五年の張議譚入奏に関する諸問題の分析）」、赤尾栄慶（京都国立博物館名誉館員）「大谷大学所蔵敦煌写経私見－書誌学的観点から－」の四報告



報告者および関係者の集合写真



黄正建研究員の報告

がなされた。なお、中国社会科学院歴史研究所より参加を予定していた王震中副所長と李錦鏐研究員が欠席

となったため、それぞれの報告は雷聞研究員、牛来穎研究員による代読により行われた。

金九経研究会開催報告

大谷大学史資料室 室長・准教授 松浦 典弘

2016年1月22日(金)、大谷大学史資料室の主催で、戦前の本学卒業生である韓国人金九経に関する研究会を響流館3階マルチメディア演習室で開催し、本学任期制助教(当時)の孫知慧氏と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授の中見立夫氏の御二方にご報告いただいた。

金九経は1899年の生まれで、1921年に当時日本の植民地であった韓国から大谷大学へ留学し、27年に支那学科を卒業した後、韓国へ戻った。1929年には北京へ移り北京大学で教鞭をとりつつ、中国人や日本人の学者や文人と交友を重ねる。1932年に満洲(奉天)へ移住し、当地での古跡調査などに携わる。この間、敦煌文献の校訂や初期禅宗史の研究に功績を残した。1945年に帰国し、ソウル大学図書館に勤務、翌年にソウル大学中国文学科の教授となった。しかしながら、その後の消息は不詳であり、一説には北朝鮮に拉致されたともいわれる。そうした背景もあって忘れ去られてしまった存在になっている金九経の生涯を探る試みの一つとして、今回の研究会を開催するに至った。

まず、孫氏から「金九経の行跡を通してみる近代東アジアの知的交流」と題して報告が行われた。氏はすでに『大谷学報』第94巻2号に「忘れられた近代の知識人「金九経」に関する調査」(2015年)を発表しておられるが、今回の報告はその内容に基づきつつ修正を加えたものである。金九経を研究するにあたっての問題点としては、一次資料の不足と近代知識交流史という観点の必要性があげられる。氏は年表形式で金九

経の生涯を整理した上で、その活動を、1. 日本留学期、2. 敦煌写本の校勘・刊行、3. 北京滞在期、4. 満洲滞在期、5. 韓国帰国後に分けて検討された。その上で、仏教学・史学の巨頭とされる人物の業績の裏側で、それらの成果を引き立てる架橋としての役割を果たした人物であると結論付けられた。

続いて、中見氏から「“境界”を跨ぐ一大谷大学朝鮮人卒業生・金九経の数奇な軌跡」と題して報告が行われた。氏は、金九経を中国の知識人と交流があり日本人学者との交流を仲立ちした人物、特異な満洲語の研究者、帝国日本における「学知」という視点から考えておられる。その生涯について、1. 大谷大学時代、2. 日本植民地下の京城における金九経、3. 北京時代、4. 奉天時代、5. 日本敗戦後の金九経と、順を追って検討を進められた。最後に、金九経が誇いだ“境界”を、朝鮮、日本、中国、「満洲国」という地域の“境界”と、中国文学、図書館・書誌学、満洲語文献という学問の“境界”であると締めくくられた。

金九経は本学卒業生であり、学术交流に貢献し、大きな学問的功績を残したにもかかわらず、後半生、行方知れずとなり、忘れられた存在となっていた人物である。今回の研究会を通して、金九経の存在が知られ、その業績が明らかにされたことの意義は大きく、大学史資料室としても、大変有益な機会を持つことができた。今後、さらに金九経の人物像が明らかにされることを期待したい。

公開講演会「カントルと能」

(2015年12月21日(月)開催)

2015年度一般研究 研究代表者・教授 番場 寛

公開講演会を開催するに至った理由

京都と東京において数回にわたって行われた「カントル研究会」においてタデウシュ・カントルの演劇と能の類似性を指摘する意見が一回ならず出されたことがある。

恐らく直接的な影響関係はないと思われる、一見全く異なった二つの舞台芸術において、それでも類似性を感じてしまう人が少なくないのはなぜであろうか？ これら二つの芸術様式の類似性がどこに由来しているのかと考えたとき、「死の表象」がどちらの作品群においても見られることに気づく。本講演会では、それぞれの表現形式がどのように「死の表象」を実現しているかを具体例とともに考察していった。

1 番場 寛：タデウシュ・カントルの劇作品における「反復」と「死の表象」について

今回の発表においてはカントルの劇の「死の表象」を以下の四つの側面から考察する。

- 1 カントル自身の伝記的事実における死
- 2 歴史的、社会的な死
- 3 「現実」におきたカントル自身の死

以上の四つの側面はお互いに絡み合っており、厳密に分けられるものではない。

「反復」という側面について

カントルの劇作品においては「死の表象」が必ずといってよいほど、「反復」という形式で見られる。本発表では、『ヴィエロポーレ・ヴィエロポーレ』における「反復」を主に、「時間的な反復」と「双数的(空間的)反復」を中心に映像を見せながら説明した。

カントルの劇における「反復」の分析

カントルはなぜこれほど執拗な反復をこの自伝的な作品で繰り返したのであろう？それを考える上で、フロイトの心的興奮を軽減させようとするメカニズムの現れとして同じ事を反復する「反復強迫」の概念を、スラヴォイ・ジジェクやジル・ドゥルーズの説明によって補強して説明した。

一方、ジャック・ラカンとは、シニフィアンとしての行為の反復が主体を形成すると同時に「対象a」を生じさせると述べ、更に、チューケーと名づけた「現実界との出会いそこね」を反復の一つの型として紹介している。

では、カントルの劇において執拗に繰り返される「反復」がその「現実界」との出会いそこねであるとしたら、その「現実界」とはどのようなものであろうか？

それは、人が生きている限り、その背後で生を脅かすことでその生を支えているが、生きている限りそれに出会うことはない「自らの死」ではないであろうか？

『私は二度とここには戻らない』の分析

この作品には、第二次大戦中にアウシュヴィッツの収容所で亡くなったと報告されているカントル自身の父親が登場している。彼の死は歴史的な出来事としての死であり、この点から今回の研究の作業の一つとしてポーランドのオシフィエンチムにあるアウシュヴィッツとビルケナウを訪れた時の調査の報告を、写真を示しながら行った。

またこの劇の最後で、全ての登場人物が黒い大きな布に覆われるアンバラージュ(梱包)という方法も「死の表象」の一つであると指摘した。

佐渡の薪能で「葵上」を観た報告

島民によって演じられてきたがゆえに、能の起源と能における「死の表象」に迫ることができるのではないかという目論見は果たされなかったが、能における「面」の役割の重要性を再認識することができたということを報告した。それはカントル自身が、マネキンを使用したことと重なると思われる。

2 河村晴久先生の講演と公演

先生はスライドを用いて、能の起源を概観された後、能の種類を説明され、弟子の樹下千慧氏の謡いのもとで舞の実演を披露された。

その後、河村先生と番場とで対談を行った。簡単にまとめると、能においては、長い歴史の中で、意識的に習得すべき所作として反復されるのに対し、カントルの劇においては、行為は彼の無意識に起因する反復強迫的な行為として反復されるのだというのが結論である。



河村晴久先生との対談の様子

公開講演会開催報告

—大谷大学所蔵タイ王室寄贈パーリ語貝葉写本の世界—

西藏文献研究 嘱託研究員・本学非常勤講師 清水 洋平

大谷大学には、今から百年余り前のタイ王室寄贈を機縁としたパーリ語貝葉写本（以下、「大谷貝葉」と表す）64套（套[とう]とは経本を数本束ねた単位）が所蔵されている。パーリ語貝葉写本としては国内最大規模であり、世界的にも有数のコレクションである。これらは東南アジア地域で書写されたものであるが、現地においても散逸しかけている貴重な文献群である。「大谷貝葉」中の個々の経典の中には、未だに出版されることもなく写本のままでしか存在していない文献も多い。仏教研究に新たな展開をもたらす貴重な資料である。

このような「大谷貝葉」について、その資料的価値を総合的に捉えた研究成果を報告する公開講演会を、2016年3月17日(木)に響流館3階マルチメディア演習室にて開催した。なお、この公開講演会に先立ち、12時から13時まで響流館1階博物館調査室にて関係資料に関する報道発表を実施した。

公開講演会のプログラムは下記の通りである。

13:30～13:35 開会の挨拶 松川節（研究・国際交流担当副学長・真宗総合研究所 所長）

13:35～14:20 「大谷大学が所蔵するタイの仏典写本について」

清水洋平（真宗総合研究所 特別研究員）

14:20～15:05 「大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本の包裂（つつみぎれ）について」

原田あゆみ（九州国立博物館 企画課特別展示室主任研究員）

佐藤留実（公益財団法人 五島美術館 学芸員）

休憩（10分）

15:15～16:00 「東洋文庫に所蔵されていたパーリ語貝葉写本について」

庄司史生（立正大学仏教学部 助教）

16:00～16:30 資料実見・休憩

16:30～17:20 総合討論

17:20 閉会

公開講演会では、上記4名の講師による講演が行われ、講演終了後には、響流館1階博物館調査室におい

て、「大谷貝葉」2套とその包裂（経典を包んでいた布）2点を参加者全員で実見する機会が持たれた。その後、講演会場で総合討論が行われた。以下、各講演の概要を掲載する。

まず、清水の講演では「大谷貝葉」に関する全体像の説明がなされると共に、「大谷貝葉」の来歴について、従來說（仏舍利奉迎の際（1900年）、タイ国王ラーマ5世から東本願寺第23代法主・大谷光演個人に寄贈されたもの）に対して新情報が提供され、来歴に関する新たな可能性が示された。

次に、原田氏と佐藤氏による講演では、原田氏からタイにおける積徳行としての布の奉納の意味合いや、日・タイ交流の歴史と文物についての説明があり、佐藤氏からインド更紗やシャム更紗など「大谷貝葉」の包裂について、本邦初の調査報告がなされた（「大谷貝葉」に付属する60枚を超える包裂は、一部の研究者にのみその価値が認知されていたものの、一般にその存在は殆ど知られていなかった）。

次いで庄司氏の講演では、「大谷貝葉」と出所が同じ可能性があることとされる、未発表の東洋文庫所蔵・河口慧海旧蔵のクメール文字パーリ語貝葉写本文献について紹介がなされた。

これらの講演を受けて、総合討論では三宅伸一郎氏（真宗総合研究所 西藏文献研究班代表）の司会進行のもと、パネリスト：吉元信行氏（本学名誉教授）・田辺和子氏（中村元東方研究所顧問）・笠松直氏（仙



公開講演会の様子

台高等専門学校准教授)や、松田和信氏(佛教学大学教授)などの多くの参加者と共に活発な質疑応答が行われた。そして、「大谷貝葉」は、仏教文献としての価値のみならず、工芸品としての価値も評価されるべきことや、日・タイ交流史の貴重な資料であることなど

も再確認された。今後は、これらの価値が総合的に捉えられた研究の進展が望まれる。

なお、総合討論の終了後、懇親会が開かれ、参加者による情報交換・研究交流がなされた。

ベトナム経典刊行略史 — 永巖寺所蔵木版を中心として —

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院 グエン・ヒュー・スー

【はじめに】

中国と同文の世界の中であって、ベトナムは、中国から伝来した訳経、大蔵経、印刷術の成果を享受した国のひとつである。しかし、多くの自然災害を経て、様々な創造を行いその伝統を継承してきたけれども、これらの伝統的遺産を保持することはベトナムにとって常に困難な問題であった。同じく漢文文化圏に属する各国と平行して、伝来してきた漢文大蔵経をベトナムでも写経し刊行してきたが、それらは常に中国より一テンポ遅れた。短い場合は、使者の派遣期間にともなう2年、長い場合は一人の王の治世の間、あまつさえ一つの王朝の全期間を費やすこともあった。

【李・陳朝期の経典刊行】

1023年、北宋の仁宗から大蔵経を下賜された李朝(1009～1225)の王は、勅令を下し初めて写経を行い大興蔵に収め、さらに1036年に第2回目の写経が行われた。北宋の開宝年間(971～983)に刊行された蜀版開宝大蔵経にいたっては、ようやく1126年にいたり聖寿寺で五部の経典の刊行が完了したことを祝う儀礼が挙行された。しかしこの事業は、単にその時点における仏典開版の詳細の一つが認められるにすぎず、ベトナムでの大蔵経刊行の絶対的な論拠の史料ではない。その後、陳朝(1225～1400)の興隆三年(1295)、大蔵経は初めて翻刻され副本が印刷された。そして、興隆十九年(1311)に法螺尊者と弟子の宝殺によって引き続き翻刻が行なわれた。

【15～18世紀の北部ベトナムにおける経典刊行】

しかしその後は、潘輝注の『歴朝憲章類誌』の文籍誌と黎貴惇の『黎朝通史』の芸文志における歴代王朝の仏教関係遺文に関するかなり内容が省略された目録以外に、長期間に亘って大蔵経の伝来あるいは印刷に

関する記事を、史書の中に見出すことが困難な時期が続く。『諸工芸祖師』によれば、明の属領期(1407～1427)では翻刻業と印刷業の伝統が途絶え、黎朝前期(1428～1527)に探花の梁如鶴(1420～1501)が中国へ使者として派遣された時、刊行技術を学ぶ方法を見出さなければならなかった。その後、紅蓼、柳場(現ハイズオン省)などの村落で印刷業が広まった。渡来した福建僧の拙公(1590～1644)は、史料的には明瞭さを欠くけれども、1647年以前に華人の弟子の明幻(1633?～1687)を帰国させ大蔵経をベトナムに運搬させて、万福寺(現バックニン省)で刊行させた。17世紀後半、水月(1637～1737)は中国の鳳凰山に学んで帰国したが、その時かなりの量の仏典を持ち帰り荏陽寺と祥光寺に収めた。真源(1647～1727)と慈山行一(1681～1737)は各地の仏教拠点：昆剛山永福寺－仏跡寺－祥光寺－安子山から経典原本を収集して再編纂した。特に真源と慈山行一の二人は黎朝の熙宗(在位1675～1705)の信任を得て、国庫の資金によって宮中で経典を刊行することができた。

中国からベトナム北部の大越国に経典が伝播することが言及される度に、特に取り上げられる最も重要な人物が如澄鱗角上士(1696～1733)の弟子性全(1711～1744)である。中国広東の鼎湖山で学んだ後、師は大量の経典を持ち帰り乾安寺(現ハノイ市)に収めた。今日では、それらの目録と総量を福田和尚の直筆史料によって明確に知ることが出来る。

【15～18世紀の中部ベトナムにおける経典刊行】

ほぼ同時時代、南北朝内乱期以前に印刷されたかなり多数の経典が、中部のクアンナム(広南)地方からクイーニョン(帰仁)地方に運ばれた。しかし、現在ではただ万徳寺(現ホイアン市)所蔵『禪心上品』序文にそれらの表題が伝わるのみである。この『禪心

上品』は、ベトナムに現存する最も古い刊行年次のある版本でもある。

阮氏広南国時代(1558～1777)に沿海交通が発展したことにともない、同国に渡来した広東僧の石濂(1633～1704)、原韶(1648～1728)ならびに多数の外国僧の指導によって大規模な戒壇が設けられ僧俗が得度し、同時に三蔵経がベトナム中南部に普及した。

【19世紀以降のベトナムにおける経典刊行】

1000年におよぶベトナムにおける経典刊行の歴史の最後を締めくくる人物は、まさに釈清行法主(1840～1936)である。1900年にフランス人が創設した極東フランス学院が高麗大蔵経(これは日本の大蔵経との情報がある)を蔵書としたので、清行法主は弟子を派遣して、それ以前は名称を聞いたことしかなかった経典を順次写経させた。同時に師自らそれらの序文と跋文を書き、寄進を集めては順番に刊行して、阮朝期(1802～1945)に臨濟宗と曹洞宗の諸祖師が刊行した経典群に加えた。

仏教関係の印刷所として数えられた150以上の仏教寺院が等しく所蔵する経典刊本の数は少なくなく、それらの半数近くはベトナム国内の書肆において刊行されたものである。

【永厳寺とその法系】

ベトナム北部バックザン省の永厳寺は、大河ルックナム河とトゥオン河の合流点に位置する。同寺はこれら大河川の三叉路を望み、東方の一大仏教聖地である安子山の入り口に当たる。永厳寺は常に「仏教宣道場」の役割を維持し、報恩寺、青梅寺、瓊林寺、花煙寺のような竹林派寺院群とも密接に関係している。

この永厳寺の現存資料による法系は以下のようである。

陳朝期

1. 第一頭陀浄慧覺皇調御聖祖
2. 第二法螺尊者、特封普慧浄智覺聖祖
3. 第三玄光尊者、国子特封三教狀元聖祖

莫朝期(1527～1677)

4. 謝法寧(妻帯者)

黎朝後期(1533～1789)

5. 僧録司僧正武文通

瓊林山門

6. 「性」の字を称号に加えた諸僧：性成、性靖
 7. 「海」の字を称号に加えた諸僧：海識、海用
- 景興(1740～1786)、西山(1788～1802)、阮朝初期
8. 「寂」、9. 「照」、10 「譜」の字を称号に持ちながら欠名の諸僧

永福山門

11. 通睿沙門、12. 心円禪師、13. 清亨律師

【永厳寺所蔵木版】

1849年に、永福派組場院主の心円禪師が永厳寺の住持を引継ぎ、1936年に清亨法主が示寂するまでの約100年間で、まさに同寺に現存しユネスコがアジア・太平洋地域における世界記憶遺産として公認した経典木版の作成年代に相当する。

こうした年代に木版が刻まれた理由は以下のようである。

－1841年、ベトナム北部に赴任した兵部尚書兼都察院、右都御使、北寧太原総督、理糧草兼軍務提督の阮登階、法名大芳もこの永福山門派に所属し、護法仏子の立場のもと、バックニン省ならびにベトナム北部全域の仏教を二つの方針によって支援した。

- a. 才徳ある僧を選抜して都(京師：現フエ市)へ送り、朝廷の考査に参加させ、冊封/恩賜刀牒を授与させた。
- b. 施主の先頭に立って蓮派寺、富兎寺、蓮池寺、蒲山寺、含龍寺、普陀寺の再建と建立を行い、諸僧の経典刊行を援助した。

【経典刊行の方法】

常に多数の経典と書籍の刊行を諸寺に分担し、一つの規格のもとに各経典の刊行責任を持たせた。その他、「三写七版」と呼ばれる刊行の重複を避けて施主の資金の浪費を防ぎ、すべての山門の門主、法派がそれぞれの寺院の経蔵にある書籍情報を十分把握した。そして、祖師を追善しあるいは道場における夏安居の終了時に行われる積善供養のための刊行や刊本授受の請求が便利のように、また既存の木版と重ならないように新しく刻版し、法宝を輪転して社会に流通させた。

20世紀初頭、ハノイに本拠を移した極東フランス学院は図書館を創設し、各分野ならびに仏教の漢字チュエノム史料を収集して、それらの「大集成」の場所とした。自分自身の威信と関係から、清亨禪師は門人をその学院に派遣して写本させ、山門の各寺に分配してそれらの刊行を行わせた。

【おわりに】

今回述べてきたことからは、すべて黎朝末期から清亨禪師が示寂するまでベトナムの仏教寺院と道場における刊行事業に関する情報を御紹介し、永厳寺がその中心となったことを皆様に御理解頂きたい。

なお、この報告は2015年10月28日(水)実施の公開講演会の配布資料で、大西和彦嘱託研究員の翻訳による。

東京分室PD研究員個人研究紹介

プロテスタント・キリスト教の世俗的役割

—タイとミャンマーにおけるカレン民族の事例から—

田崎 郁子

私はこれまで、東南アジア大陸部山地における社会変容について、生業と宗教を中心テーマに、農学と文化人類学の視点を交差させながら研究を行ってきた。特に、タイに居住するカレンと呼ばれる少数民族を事例に、①その民族表象と生業との関連や、②プロテスタント・キリスト教の受容とそれに伴う生業や社会の変容について、論じてきた。

カレンは、タイに居住する「山地民」としては最大の人口を占め、国民国家におけるマイノリティの位置づけを考える際に重要な存在である。修士課程では、農学の視点から、若者を中心とする都市への移動や現金経済の導入が、村の焼畑稲作を中心とする生業と既婚女性の役割分業に与える影響について、住民の視点から調査した。博士課程では、タイへ3年間渡航し、カレン語とタイ語を用いた住み込みでの村落滞在調査を行った。その成果をまとめた博士論文では、プロテスタント・キリスト教と親和性の高い資本主義経済体制との関連に着目して、イチゴ栽培という多大な初期投資・労働投入の下で、カレンの人々の労働にまつわる規範や贈与と互酬に関する概念の変容について考察



北タイのカレン村落にて、牧師による洗礼式

した。そして、教会活動のみならず生産労働、家事労働、リーダーシップなど異なる様々な領域がキリスト教的価値観に結び付けられて規範を形成していること、また、社会関係を重視した労働への取り組みや、教会活動との兼ね合いで決定する労働分業のあり方を示した。さらに、キリスト教実践と慈善や贈与の関係を示すことで、キリスト教化が社会に埋め込まれたセルフから脱社会化した合理的個人を形成するという近代化論に対し、経済合理性をもたらす一方でコミュニティの共同性を強化する内向的発展という規範を形成するという別のあり方を示した。これによって、タイ北部山地において、キリスト教受容と生業活動が相互に規定しあい社会を再編してきた過程を描き出した。

今後はミャンマーとタイに居住するキリスト教徒カレンを事例として、プロテスタント・キリスト教の世俗的役割について研究を行う。そして、キリスト教の宗教実践とローカルな社会関係や経済活動との関連性やその相互動態を明らかにすることで、キリスト教徒であるということが、いわゆる宗教という言葉で想定される領域を超えて、社会関係や経済活動など他の領域と相互作用の中にあり、村の生活そのものとなっていることを示す。

東南アジアのキリスト教宣教や受容に関する人類学的先行研究では、アイデンティティとの関連や教義や神格の解釈といった形而上学的な側面から論じられることが多かった。しかし、アフリカやオセアニアなどの事例を見ると、キリスト教の受容は、形而上学的側面だけでなく、生活スタイルや社会の在り方そのものを再編することが指摘されている。本研究でもこの視点に着目し、日常生活特に経済活動や開発、教育といった世俗的な文脈におけるキリスト教の役割について調査・考察を行う。

調査地は、これまで私が調査を続けてきたタイ北部チェンマイ県のボケオ行政区のほか、新たにミャンマーのヤンゴンやモールメインといった都市部の教会や農村部を加える。カレンの間では1828年にビルマで最初のバプテスマ派への改宗者が登場して以降急速にキリスト教が普及し、改宗したカレンの人々はタイとビルマを中心とする地域のプロテスタント・キリスト教の宣教や教会活動を牽引してきた。ラフヤリス、カチンなど山地に居住する他の集団への布教の多くを担ってきたのもカレンである。そのため、キリスト教人口が多く歴史も長いミャンマーと、私が調査を続けてきたタイで、キリスト教の世俗的役割について比較

をし、それが異なる歴史や国民国家化の中でどう表出しているのか、という点についても検討する。

「化身土巻」読解を中心とした 親鸞思想の総合的研究

藤原 智

浄土真宗の宗祖と仰がれる親鸞は、これまでそれぞれの時代的制約を孕みながらも、様々な立場からその思想が研究されてきた。しかしながら、現代においてなお十分でない指摘されるのが、主著『教行信証』の「化身土巻」の後半部分の研究である。著作の一部が等閑視されたまま行われた思想研究が十全なものでないことは言うまでもない。

この箇所は、特に戦後において親鸞の批判精神を示すものとして家永三郎などによって注目されたが、それも言葉を拾い上げるような見方に留まってしまっていた。ただし、そのように注目されるということは、それが親鸞の時代社会に対する積極的な発言の箇所だということである。しかしだからこそ、その時代社会と隔たってしまった後代には、その発言の意義が十分に了解できず、研究が進まなかったものと推測できるのである。

今の時代で親鸞研究に求められているのは、歴史的反省を踏まえながら、親鸞思想の積極性を提示することであろう。「化身土巻」の研究は、まさにその親鸞自身の積極性の研究であり、ひいては今の時代社会への親鸞思想の積極的発言へと繋がっていくことなるであろう。

近年は、様々な分野から親鸞の生きた中世という時代の解明が進められ、新たな多くの資料や見解が提示されている。そのような成果を踏まえながら、研究代表者はこれまで「化身土巻」後半部分の基礎的読解を続けてきた。それにより、甚だ不十分ではあるが、これまでブラックボックスのような扱いであった「化身土巻」の後半に光を当てることができた。そこから問題となってくるのは、その読解から反って『教行信証』全体、そして親鸞思想が現代にどのように読み直されるのかということである。ここに本研究の目的がある。

より具体的には次の課題がある。

(1) これまでの「化身土巻」研究のより精確な読解。特に、その中心となる『弁正論』のテキスト研究が大きな課題である。親鸞の引用する『弁正論』は、多く

の誤字、もしくは意図的書き換えがあるのだとこれまで指摘されてきた。その状況に対し、国際仏教学大学院大学の協力を得て、これまでいくつかの平安・鎌倉期の古写本『弁正論』の調査ができた。その調査から、これまで誤字と考えられてきた多くの箇所が、あくまで親鸞が見た原テキストによるものであるということが判明した。ただし、未だ不明な点が多い。そこで、これまでできていない『弁正論』諸本の調査を可能な限り行い、中世日本におけるその伝播状況を検討しつつ、親鸞の見た『弁正論』がいかなるテキストであったのかをより詳細に解明する。

(2) 「化身土巻」からの『教行信証』全体的見直し。今、特に注目しているのが「信巻」に長く引用された『涅槃経』の阿闍世王の救済譚の意義についてである。この『涅槃経』の引用は、親鸞が八十歳を越えてまで筆を入れていたと指摘される箇所であり、親鸞が最後まで課題とした箇所とすることができる。そして「化身土巻」において親鸞は、『弁正論』から父殺しの阿闍世王の救済についての議論を引用している。ここに「信巻」と「化身土巻」を一貫する罪悪に関する親鸞の問題意識が看取できるのである。このような「化身土巻」から見出される『教行信証』の課題を検討していく。

(3) 清沢満之や曾我量深に代表される、いわゆる近代真宗教学の再検討。現代に親鸞思想を考える際、特に近代以降のように親鸞が語られてきたのかということと分けることはできない。そこで、非常に影響力をもった上記の両氏の思想を再検討することにより、現代の親鸞研究を考える手がかりとしたい。その前段階として、研究代表者は『中道』誌における曾我晩年の講話録を収集し、昨年『曾我量深講話録』全五巻として刊行した。そこで得られた知見などを通しながら、現在の親鸞研究への影響を検討していく。



これまで収集または刊行した曾我量深関連書籍の一部

中世キリスト教神秘思想における「関係」概念の受容とその存在論における展開

松澤 裕樹

これまでの研究では、中世ドイツの代表的な神秘思想家であるマイスター・エックハルト (ca. 1260-1328) の存在論を中心に扱ってきた。十二世紀から本格的に始まった西欧におけるアリストテレス哲学の再受容により、彼が活躍した十三世紀の存在論は、アリストテレス『カテゴリー論』に端を発する「実体」概念を用いたスコラ哲学特有の「実体的存在論」が主流を占めていた。そのような時代に、エックハルトは「実体的存在論」を克服し、アリストテレス哲学において「実体」に付帯する偶有性を示すに過ぎなかった「関係」概念を存在論の中核に据えるという彼独自の「関係的存在論」を展開した。

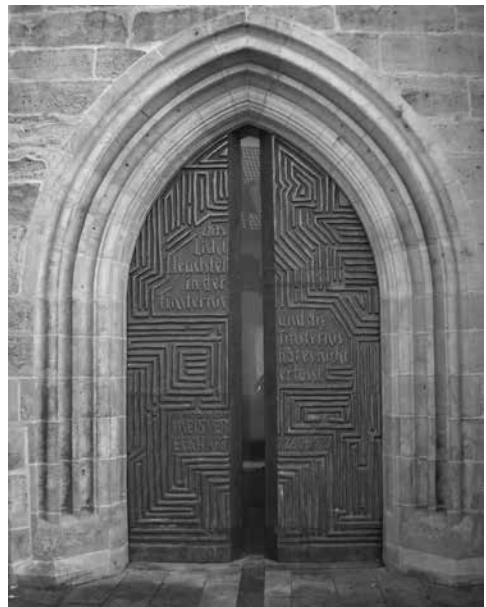
しかし、彼が成し遂げた存在論におけるパラダイム転換は、従来の研究では全く注目されることはなく、それゆえ、彼の存在論の哲学史における重要性はこれまで完全に見過ごされてきた。例えば、二十世紀の代表的哲学者の一人であるハインリッヒ・ロンバッハは主著『実体・体系・構造』において、中世哲学における「実体的存在論」の克服を、エックハルトより約一世紀半後に生きた十五世紀の神秘思想家であるニコラウス・クザヌス (1401-1464) の存在論に読み取った。博士論文では、上記のロンバッハの見解を批判し、現在まで等閑に付されてきたエックハルトの存在論を哲学史上に位置付けるため、彼が思想的に多大な影響を受けたアウグスティヌス (354-430) とトマス・アクィナス (ca. 1225-1274) の存在論と比較しながら、彼の「関係的存在論」の内実とその独自性を明らかにした。

これからの研究では、エックハルトの存在論研究からは少し距離を置き、より広い視点から、「関係的存在論」とは一般的にいかなる哲学史的枠組みの中で理解されるべきかという問題を探求していく。ロンバッハは前述の主著で、中世哲学における「実体的存在論」の克服と「関係的(機能的)存在論」の誕生を、中世的思惟構造から近代的思惟構造への移行を象徴するものと解釈した。しかし、この解釈はクザヌスの存在論の部分的理解から導かれたものであり、同様の解釈を「関係的存在論」全般に適用することはできない。なぜなら、すでに博士論文で指摘したように、エックハルトの「関係的存在論」は、正統的キリスト教が適

用したスコラ哲学の思惟構造によっては表現され得ない中世キリスト教神秘思想特有の思惟内容に表現を与えるために生み出されたものと解釈されるからである。

従って、本研究ではまず初めに、「関係的存在論」とは一般的に中世キリスト教神秘思想特有の存在論であるという仮説を立て、これを上記の問題を解明するための糸口とする。そして、この仮説の正当性を検証するために、アリストテレス哲学の「関係」概念を受容し、さらにその概念をそれぞれの存在論に適用した三人の中世キリスト教神秘思想家、ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ (ca. 815-877)、エックハルト、クザヌスを研究対象とし、時代的に異なる三者の「関係的存在論」を詳細に比較検討する。この研究を通じて、中世キリスト教神秘思想における「関係的存在論」の多様性を包括的に理解し、それが一般的にいかなる哲学史的枠組みの中で理解されるべきかという問題の解明へと繋げていきたい。

キリスト教思想における「関係的存在論」を扱う本研究は、また同時に、仏教思想を背景として展開してきた近代日本哲学(西田幾多郎・和辻哲郎等)における「関係的存在論」との比較研究を射程に入れたものであり、それに向けた基礎的研究としての位置付けを持っている。



ドイツ・エアフルトにあるブレディガー教会の総門。この教会に付設された修道院でマイスター・エックハルトは修道士見習いとして長い修業時代を送り、パリ大学で学士となった後、再びこの地に戻り、エアフルト修道院長、ドミニコ会サクソニア管区長としての務めを果たした。総門には、ヨハネ福音書一章五節の言葉と彼の名前が刻まれている。

真宗総合研究所彙報 2015. 11. 1 ~ 2016. 4. 30

■研究所関係

○研究所委員会

◇2015年12月1日(火) 12:20 ~ 12:50 (博綜館 第5会議室)

1. 紀要投稿論文査読結果について
2. その他

◇2016年1月18日(月) 12:20 ~ 13:20 (博綜館 第5会議室)

1. 2016年度「一般研究」の採択について
2. SAT大正新脩大藏經テキストデータベース作業スペースの設置について
3. 東京分室設置における規程細則の制定及び一部改正について
4. 東京分室設置準備の進捗状況について
5. 紀要投稿ガイドラインの一部改正について
6. その他

◇2016年2月23日(火) 11:00 ~ 11:45 (博綜館 第4会議室)

1. 東京分室PD研究員採用について
2. モンゴル国立大学との学术交流に関する協定(再協定)
3. その他

◇2016年3月25日(金) 10:00 ~ 10:55 (博綜館 第5会議室)

1. 2016年度「指定研究・資料室」研究組織・研究計画について
2. 客員研究員の委嘱について
3. その他

○2015年度「特定・指定研究」「資料室」研究成果報告会

◇2016年3月8日(火) 16:00 ~ 18:00 (響流館3階 マルチメディア演習室)

○2015年度第2回研究員総会

◇2016年3月8日(火) 18:10 ~ 20:00 (響流館3階 マルチメディア演習室、Big Valley Cafe)

■東京分室

○大谷大学真宗総合研究所東京分室開所

◇2016年4月11日(月)

○親鸞仏教センター移転開所式、大谷大学真宗総合研究所東京分室開所式

◇2016年4月27日(水) 11:00 ~ 12:30 (東京都文京区湯島2丁目19-11 親鸞仏教センター)

教如上人研究

【研究会】

◇第8回研究会

日 時：2015年11月20日(金) 17:00 ~ 18:30

場 所：響流館4階会議室

内 容：①光現寺・徳満寺調査の成果と今後の方針について
②春日五日講調査の成果と今後の方針について

夏に実施した、光現寺(長浜市)・徳満寺(長浜市)・春日五日講八ヶ寺組(岐阜県揖斐川町)における調査成果の報告・検討とともに、報告書等にまとめるための方針について議論がなされた。

参加者：大桑齊・川端泰幸・草野顕之・東館紹見・百武涼子・平野寿則・星津香美

◇第9回研究会

日 時：2016年1月13日(水) 17:00 ~ 18:30

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：①春日五日講調査報告書案の検討
②新潟高田本誓寺予備調査の報告(川端泰幸)
③今後の調査について

①では春日五日講の報告書案を全員で確認・検討した。②は、かつて越後国における有力な浄土真宗寺院であった高田本誓寺の予備調査について、川端研究員より報告がなされた。約200点にもおよぶ法宝物類が十分に整理されていない現状や、その法宝物類の重要性について議論がなされた。

◇第10回研究会

日 時：2016年3月15日(火) 17:00 ~ 18:30

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：①新潟高田本誓寺第一次調査の報告(川端

泰幸)

③今後の調査について

①3月に行った本誓寺第一次調査の報告が画像スライドなどを用いてなされ、内容に関する検討が行われた。②では、今後の調査予定等について、確認がなされた。

【調査】

◇2016年2月22日(月) 9:00～16:30

場 所：真宗大谷派岡崎別院（京都市左京区）

内 容：教如上人御影・教如上人消息（写）ほか、別院所蔵資料の調書作成・撮影

真宗大谷派岡崎別院は、親鸞聖人の草庵跡と伝わっていた地に、19世紀の初頭になって、第20代・達如上人が建立した別院である。別院には教如上人御影および、教如上人消息の写しの他、多数の法宝物類が遺されており、調査・撮影を行った。

参加者：老泉量・川端泰幸・工藤克洋・東館紹見・百武涼子・平野寿則・星津香美

◇2016年3月5日(土)～7日(月)

場 所：真宗大谷派本誓寺第一次調査（新潟県上越市）

内 容：教如上人消息ほか、寺蔵資料の調書作成・撮影・整理

真宗大谷派本誓寺は教念を初代とする寺院で、戦国時代、超賢の時代には越後の大名・上杉謙信と親交を厚くし、本願寺と上杉氏との間をつなぐという非常に重要な役割を果たした寺院である。この調査では200点以上におよぶ史料の全体像を把握すべく、整理番号を付すとともに、調書作成・写真撮影を行った。

参加者：川端泰幸・工藤克洋・百武涼子・湊悠介

清沢満之研究

【ミーティング】

◇第4回ミーティング

日 時：2016年2月3日(水) 13:00～14:30

出席者：藤原正寿、加来雄之、一楽真、西本祐攝、村上良顕、石原樹

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

目 的：研究会の事前打ち合わせ

【研究会】

◇第1回研究会

日 時：2016年2月3日(水) 15:00～17:00

会 場：マルチメディア演習室

出席者：藤原正寿、加来雄之、一楽真、西本祐攝、村上良顕、石原樹

講 師：杉本耕一氏（愛媛大学准教授）

講 題：「清沢満之と宗教哲学」

目 的：『清沢満之全集』補遺の編集・出版に向けて、宗教哲学の分野の見識を深める

【出張】

日 時：2016年3月17日(木)

出席者：西本祐攝、藤原正寿

場 所：求道会館

目 的：親鸞仏教センター主催「第二回清沢満之研究交流会」への参加

日 時：2016年3月24日(木)～25日(金)

出席者：藤原正寿、西本祐攝、村上良顕、百武涼子

場 所：真宗大谷派長徳寺

目 的：『清沢満之全集』（補遺）刊行にむけた書簡

や講義録等の資料調査及び収集

国際仏教研究

〈英米班〉

【研究会】

◇エトヴェシ・ロラード大学（ELTE）との第2回国際仏教シンポジウム学内発表者の事前研究会

①2016年2月12日(金) 13:00～14:30（於 響流館3F演習室5）

②2016年3月11日(金) 13:00～15:00（於 響流館3F演習室3）

【会議】

◇シンポジウム関係の打ち合わせ

①2016年3月11日(金) 16:00～18:00（於 博綜館5F H503）

②2016年4月15日(金) 16:20～18:00（於 真宗総合研究所内ミーティングルーム）

◇国際研前期活動報告及び後期活動計画ヒアリング

①2015年11月11日(水) 9:45～10:30（於 真宗総合研究所内事務室）

また上記の他、従来収集してきた仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開のために資料収集・整理を随時行っている。

〈東アジア班〉

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく共同研究の一環として、2015年12月19日(土)に本学の教員2名に加え、海外から4名、国内から4名の研究者を招聘し、「中国古代史及び敦煌・トルファン文書研究国際シンポジウム」を開催した。あわせて、大谷大学博物館に所蔵される敦煌文書の閲覧を行った。

- ①王震中(代読:雷聞)「中国国家形態結構の演進と民族類型的関係」
- ②江村治樹「中国新石器時代の都市発達をめぐる諸問題」
- ③牛来穎「大谷馬政文書と《既牧令》研究—以進馬文書為切入点」
- ④浅見直一郎「随葬衣物疏をめぐる」
- ⑤李錦綉(代読:牛来穎)「“移隸葱嶺”と唐代的西域経営」
- ⑥松浦典弘「杏雨書屋所蔵の敦煌仏教関係文献—羽699を中心に—」
- ⑦雷聞「隋唐的郷官と老人—従大谷文書4026《郷官名簿》説起」
- ⑧中田裕子「5、6世紀におけるアルタイ地方の交易拠点—回鶻路をめぐる」
- ⑨礪波護「敦煌と京都の五台山」
- ⑩黄正建「大谷占ト文書研究(之一)—兼与敦煌占ト文書比較—」
- ⑪楊宝玉「羽032-1《駙程記》与大中五年張議譚入奏諸問題弁析」
- ⑫赤尾栄慶「大谷大学所蔵敦煌写経私見—書誌学的観点から—」

当初、中国社会科学院歴史研究所より参加を予定していた王震中副所長と李錦綉研究員が欠席となったため、それぞれの報告については代読がなされた。

西藏文献研究

【海外出張】

◇11月5日(木)～8日(日)

モンゴル国立大学との研究協力協定に基づく共同研究の報告会参加

出張者:松川節(国際交流担当副学長兼真宗総合研究所長)・三宅伸一郎・武田和哉

11月7日(土) 共同研究報告会開催 於:モンゴル国立大学(ウランバートル市)

テーマ:「13～17世紀モンゴル仏教寺院の研究」

報告者および内容

- ・A. オテル氏「17世紀北モンゴルで建立された若干の寺院の建築様式について」

- ・三宅伸一郎「ケンチェン・パンディタ=イシ・バルデンによるモンゴルの王統と仏教史について」
- ・P. デルゲルジャルガル氏「モンゴル仏教寺院で規範とされていた若干の寺規について」
- ・N. アムガラン師「新発見の一寺規」
- ・U. エルデネバト氏「カラコルムにおける「興元閣」の考古学的研究」
- ・武田和哉「モンゴル国ドルノド県ヘルレン・パルス・ホト所在磚積八角仏塔に関する調査所見および一考察」
- ・M. ガントヤー氏「16～17世紀の境界においてモンゴル人が仏教に対峙した特徴(研究概要より)」
- ・松川 節「モンゴル国立大学・大谷大学共同“後伝期モンゴル仏教の寺院”プロジェクト2013～2015年度研究成果より」

【嘱託研究員招聘】

◇1月21日(木)～22日(金)

高本康子氏(西藏文献研究班嘱託研究員・北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員)

招聘理由:寺本婉雅研究に係る資料実見・整理作業および打ち合わせ

◇4月21日(木)～22日(金)

高本康子氏(西藏文献研究班嘱託研究員・北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員)

招聘理由:寺本婉雅研究推進に関する打ち合わせ

【公開講演会】

◇3月17日(木) 午後1時半～5時半(響流館三階・マルチメディア演習室)

テーマ:「大谷大学所蔵タイ王室寄贈パリー語貝葉写本の世界」

講演者および内容

- ・清水洋平(真宗総合研究所特別研究員)「大谷大学が所蔵するタイの仏典写本について」

- ・原田あゆみ氏(九州国立博物館企画課特別展示室主任研究員)・佐藤留実氏(五島美術館学芸員)「大谷大学所蔵パリー語貝葉写本の包裂(つつみぎれ)について」

- ・庄司史生氏(立正大学仏教学部助教)「東洋文庫に所蔵されていたパリー語貝葉写本について」

- ・総合討論 司会:三宅伸一郎

- パネラー:清水洋平・原田あゆみ氏・佐藤留実氏・庄司史生氏・吉元信行氏(本学名誉教授)・田辺和子氏(中村元東方研究所顧問)・笠松直氏(仙台高等専門学校准教授)・松川節(国際交流担当)

副学長兼真宗総合研究所長・松浦典弘（真宗総合研究所主事）

※この公開講演会に先立ち、12時より博物館内にて関係資料に関する報道発表を実施した。

【出張】

◇3月12日(土)

場 所：村岡利一氏 宅（滋賀県蒲生郡竜王町）
目 的：借用資料返却および内容報告・御礼言上
出張者：三宅伸一郎・藤田義孝

◇3月28日(月)

場 所：宗林寺 桂恵子氏 宅（富山県南砺市）
目 的：借用資料返却および内容報告・御礼言上
出張者：三宅伸一郎・武田和哉

【研究員打ち合わせ】

場 所：真宗総合研究所ミーティングルームほか
内 容：研究班の運営・企画・諸問題に関する調整
開催日：11月12日(木)、11月26日(木)、12月10日(木)、1月14日(木)、1月28日(木)、2月2日(火)、3月2日(火)、3月10日(木)、4月5日(火)、4月15日(金)、4月28日(木)

【実務作業担当者ミーティング】

場 所：真宗総合研究所西蔵文献研究班ブースほか
内 容：研究班の実務および作業実施に関する調整等
開催日：11月18日(木)、12月25日(金)、1月21日(木)、1月26日(火)、1月28日(木)、2月23日(火)、3月2日(木)、4月5日(火)

ベトナム仏教研究

【学会参加】

◇東方学会平成27年度秋季学術大会

日 時：2015年11月5日(木)～6日(金)
会 場：日本教育会館（東京都千代田区一ツ橋）
講 演：桃木至朗（嘱託研究員）「金石文から見た中世ベトナムの国家・社会」
参 加：浅見直一郎（研究員）

【成果報告会】

◇2015年度「特定・指定研究」「資料室」研究成果報告会
日 時：2016年3月8日(火)
参加・発表：織田顕祐（研究代表者）

【ベトナム調査】

◇打合せ

日 時：2016年3月5日(土) 15時～18時
会 場：織田顕祐個人研究室
出 席：織田顕祐（研究代表者）、大西和彦（嘱託研究員）

◇出張

期 間：2016年3月21日(月)～26日(土)
出 張：織田顕祐（研究代表者）、箕浦暁雄（研究員）
同 行：大西和彦（嘱託研究員）

大谷大学史資料室

【研究会参加】

◇第1回広島大学文書館研究集会

日 程：2015年12月5日(土)
場 所：広島大学東広島キャンパス 文学研究科棟153教室
参加者：松岡智美

◇全国大学史資料協議会西日本部会 2015年度第4回研究会

日 程：2015年12月15日(火)
場 所：高島屋史料館
参加者：松岡智美

【公開研究会開催】

日 時：2016年1月22日(金) 15:00～17:30
場 所：響流館3階・マルチメディア演習室
報 告：孫知慧（本学任期制助教）
「金九経の行跡を通してみる近代東アジアの知識交流」
中見立夫（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）
「“境界”を跨ぐ—大谷大学朝鮮人卒業生・金九経の数奇な軌跡—」

【ミーティング】

◇2015年12月7日(月) 11:00～12:00

出席者：松浦典弘・戸次顕彰・松岡智美
場 所：真宗総合研究所
内 容：業務報告と展示作業の企画など

◇2016年3月30日(木) 17:00～17:30

出席者：松浦典弘・戸次顕彰・松岡智美
場 所：真宗総合研究所
内 容：2015年度の成果報告と展示作業の企画など

【大谷大学史資料室スポット展示関係の作業】

◇2016年2月10日(木)

タイトル：「大谷大学の歴史をたどる～図書館トリ

ピア〜」

参加者：戸次顕彰・松岡智美

場所：大谷大学図書館入口展示スペース

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

■一般研究出張関係

一般研究武田班①

日時：2015年12月19日(土)～20日(日)

出張先：独立行政法人奈良文化財研究所・特別史跡平城宮跡

用務：「デジタルアーカイブ技術を用いた契丹(遼朝)の文化財分析および収蔵展示手法」研究集会と平城宮跡資料館の展示技法に関する見学検討会の主催および研究集会の司会進行・報告等

出張者：武田和哉、藤原崇人、町田吉隆、高橋学時、福井敏

招聘者：馬鳳磊(赤峰市博物館副館長)

通訳・案内：方国花

日時：2016年1月9日(土)

出張先：独立行政法人奈良文化財研究所

用務：公開講演会「遼金時代の歴史学・考古学研究の現在」の主催および司会進行・報告等

出張者：武田和哉ほか

招聘者：魏 堅(中国人民大学教授)

通訳・案内：方国花

日時：2016年2月20日(土)～21日(日)

開催地：大谷大学真宗総合研究所

用務：科学研究費による成果物取りまとめ編集会議の開催と資料調査

参加者：藤原崇人、町田吉隆、高橋学時

一般研究武田班②

日時：2016年2月23日(火)～26日(金)

出張先：松山市にぎたつ会館(会議場)、今治市内アブラナ科植物自生地(織田ヶ浜・吉海町内)、JA越智今治関係施設

用務：研究会議開催と関係施設等の視察・調査

出張者：武田和哉ほか

日時：2016年4月9日(土)

開催地：大谷大学真宗総合研究所・大谷大学図書館

用務：科研班文系研究者打ち合わせ

参加者：武田和哉、横内裕人、江川武部、清水洋平、等々力政彦、吉川真司

一般研究松川班①

日時：2015年12月22日(火)～30日(休)

出張先：中央民族大学(中華人民共和国・北京)、国際遊牧文明研究所(モンゴル・ウランバートル市)、カラコルム博物館(モンゴル・オヴォルハンガイ県ハラホリン郡)

用務：モンゴル国カラコルム博物館の情報化に関する調査・研究

出張者：松川節

日時：2016年3月10日(木)～16日(休)

出張先：国際遊牧文明研究所、モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所、政府宮殿博物館(モンゴル・ウランバートル市)

用務：モンゴル国カラコルム博物館の情報化に関する調査・研究

出張者：松川節

日時：2016年4月28日(木)～5月8日(日)

出張先：モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所、国際遊牧文明研究所、国立文化遺産センター、カラコルム博物館、ガンダン寺学術文化研究所(モンゴル・ウランバートル市、ヘンティ県オムノデルゲル郡・バトシレート郡、オボルハンガイ県ハラホリン市)

用務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査・研究

出張者：松川節

一般研究柴田班

日時：2016年3月12日(土)

出張先：慶應義塾大学矢上キャンパス

用務：情報処理学会第78回全国大会での2015年度研究成果の発表

出張者：三浦誉史加

日時：2016年3月12日(土)～14日(月)

出張先：慶應義塾大学矢上キャンパス、徳川ミュー

ジウム、東京国立博物館、東京都美術館、
国立西洋美術館

用 務：情報処理学会第78回全国大会での2015年度
研究成果の発表と研究資料収集

出張者：柴田みゆき

一般研究阿部班

日 時：2015年11月21日(土)～12月1日(火)

出張先：タマサート大学図書館（タイ・バンコク）、
カンボジア特別法廷・カンボジア史料セン
ター（カンボジア・プノンペン）

用 務：移行期正義の社会的影響に関する現地調査

出張者：阿部利洋

日 時：2015年12月21日(月)～2016年1月1日(金)

出張先：オランダ抵抗博物館、アンネフランクの家
（オランダ・アムステルダム）、国際司法裁
判所（オランダ・デン・ハーグ）、ザクセン
ハウゼン強制収容所、ホロコースト記念碑、
シュタージ博物館（ドイツ・ベルリン）、
アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所、
ユダヤ人博物館（ポーランド・クラクフ）

用 務：移行期正義の社会的影響に関する現地調査

出張者：阿部利洋

一般研究佐々木班

日 時：2016年3月22日(火)～23日(水)

出張先：大学コンソーシアム石川「しいのき迎賓館」
セミナールームA

用 務：精神医療倫理科研第2回研究会への参加

出張者：佐々木拓

一般研究田中班

日 時：2016年4月24日(日)

出張先：名古屋大学法学部・大学院法学研究科

用 務：日本ゲルタイ協会関西大会シンポジウム
打ち合わせ会

出張者：田中潤一

一般研究福田班

日 時：2015年11月16日(月)～17日(火)

出張先：大谷大学

用 務：チャパ・チューキセングの『ブラマーナ・
ヴィニシュチャヤ』第二章自性因の箇所
の読解（2014年度よりの継続）

参加者：福田洋一、崔境眞

一般研究井黒班

日 時：2015年12月12日(土)

出張先：明治大学駿河台校舎

用 務：本研究課題において中心的材料として用い
る石刻史料に関連した「日中合同中国石刻
国際シンポジウム」参加。

出張者：井黒忍

日 時：2016年3月25日(金)～26日(土)

出張先：東北学院大学、東北大学附属図書館

用 務：研究ワークショップ「帝国と地域を結びつ
ける水利政策」への参加および東北大学附
属図書館における拓本資料調査

出張者：井黒忍

一般研究上田班

日 時：2015年10月31日(土)～11月1日(日)

出張先：西南学院大学（福岡県）

用 務：社会政策学会への参加

出張者：上田早記子

一般研究西沢班

日 時：2015年11月4日(水)～6日(金)、12月16日(水)～
19日(土)、2016年1月6日(水)～9日(土)、2月
16日(水)～19日(金)、3月8日(水)～11日(金)、
28日(月)～31日(木)

出張先：大谷大学真宗総合研究所

用 務：チベット古文書学研究会開催のため

出張者：西沢史仁

日 時：2015年11月14日(土)～15日(日)

出張先：四天王寺大学

用 務：第63回日本チベット学会大会参加のため

出張者：西沢史仁

一般研究古荘班

日 時：2016年3月3日(木)～4日(金)

出張先：高梁市有漢生涯学習センター

用 務：網島梁川に関する資料調査

出張者：古荘匡義

日 時：2016年3月17日(木)

出張先：求道会館

用 務：第2回清沢満之研究交流会への参加

出張者：古荘匡義

一般研究田鍋班

日 時：2016年2月21日(日)～29日(月)
 出張先：①マールバッハ・ドイツ文書館 (Deutsches Literaturarchiv Marbach) (バーデン=ヴェルテンベルク州 ルートヴィヒスブルク郡 マールバッハ・アム・ネッカー (Marbach am Neckar, Landkreis Ludwigsburg, Land Baden-Württemberg)) ②フライブルク大学 (Albert-Ludwigs-Universität Freiburg) (バーデン=ヴェルテンベルク州 フライブルク・イム・ブライスガウ (Freiburg im Breisgau, Land Baden-Württemberg))
 用 務：「黒ノート」の刊行に伴い提起された、ハイデッガー全集の編集上の疑義に関する資料調査。および「黒ノート」刊行後のフライブルク大学の現状に関する調査。
 出張者：田鍋良臣

一般研究藤原班

日 時：2016年2月8日(月)～16日(火)
 出張先：ドイツ国立図書館 Deutsche National Bibliothek、バイエルン州立図書館 Bayerische Staatsbibliothek、(ドイツ・フランクフルト、ミュンヘン)シュティフター研究所 Stifterhaus (オーストリア・リンツ)
 用 務：日本では収集が困難なシュティフター関連の学術文献ならびに障がい児教育に関する文献の入手。現地における最新の研究動向の調査。
 出張者：藤原美沙

一般研究番場班

日 時：2015年12月18日(金)～20日(日)
 出張先：東京芸術劇場
 用 務：カントルワークショップへの参加
 出張者：番場寛

一般研究酒井班

日 時：2016年3月3日(木)～4日(金)
 出張先：宮古島市役所 中央公民館
 用 務：ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会の参加及び研究発表
 出張者：酒井恵光、中山健

 日 時：2016年3月5日(土)～13日(日)
 出張先：サンフランシスコ・ソノマ (アメリカ)

用 務：ACM IUI 2016 (Association for Computer Machinery : Intelligent User Interfaces) への参加
 出張者：酒井恵光

一般研究宮崎班

日 時：2015年11月2日(月)
 出張先：京都国立博物館
 用 務：『般若心経』(隅寺心経)の実物調査
 出張者：宮崎健司

 日 時：2015年11月27日(金)～29日(日)
 出張先：静嘉堂文庫美術館、五島美術館、大東急記念文庫、神奈川県立金沢文庫、称名寺
 用 務：『般若心経』(隅寺心経)の実物調査及び調査の事前相談
 出張者：宮崎健司

日 時：2015年12月11日(金)
 出張先：奈良国立博物館
 用 務：『般若心経』(隅寺心経)の実物調査
 出張者：宮崎健司

日 時：2015年12月19日(土)～20日(日)
 出張先：早稲田大学文学学術院
 用 務：『般若心経』(隅寺心経)に関わる古写経研究集会への参加
 出張者：宮崎健司

日 時：2016年2月9日(火)
 出張先：五島美術館、大東急記念文庫
 用 務：『般若心経』(隅寺心経)の実物の再調査および撮影
 出張者：宮崎健司

日 時：2016年2月29日(月)～3月2日(水)
 出張先：台東区立書道博物館、東北大学附属図書館、国立歴史民俗博物館
 用 務：『般若心経』(隅寺心経)の実物調査および関係写経調査
 出張者：宮崎健司

日 時：2016年3月4日(金)～5日(土)
 出張先：長保寺、和歌山県立博物館
 用 務：『般若心経』(隅寺心経)の実物調査及び関係調査

出張者：宮崎健司

日 時：2016年3月15日(火)～17日(木)

出張先：善通寺、太山寺、愛媛県美術館、愛媛県歴史文化博物館

用 務：『般若心経』（隅寺心経）の実物調査及び事前調査

出張者：宮崎健司

一般研究協中班

日 時：2015年11月4日(水)

出張先：播磨社会復帰促進センター

用 務：クラウニング講座の効果検証に関する発表

出張者：脇中洋

日 時：2015年11月10日(火)、17日(火)、24日(火)、12月1日(火)、8日(火)、22日(火)、1月12日(火)、19日(火)、26日(火)、3月15日(火)

出張先：播磨社会復帰促進センター

用 務：クラウニング講座第10クールでの調査

出張者：脇中洋

日 時：2016年3月4日(金)～7日(月)

出張先：ヴィクトリア警察、ヴィクトリア脳損傷者協会、ビルマッジハウス（ハーフウェイハウス）（カナダ・BC州ヴィクトリア）

用 務：カナダBC州ヴィクトリアの被疑者取調べと更生保護の調査

出張者：脇中洋

■人事

東京分室長（2016年4月1日付）

池上哲司（名誉教授）

■PD研究員（東京分室）

□新規採用（2016年4月1日付）

田崎郁子

藤原智

松澤裕樹

■特別研究員

□新規採用（2016年4月1日付）

* 田崎郁子

現 職：PD研究員

研究期間：2016年4月1日～2017年3月31日

研究課題：キリスト教聖書の翻訳にみられる現地語語彙の選択とローカル社会の再編

* 関本真乃

現 職：任期制助教

研究期間：2016年4月1日～2018年3月31日

研究課題：『苔の衣』諸伝本の本文研究及び校本作成

* 宮崎展昌

現 職：任期制助教

研究期間：2016年4月1日～2019年3月31日

研究課題：現存大藏経諸本をもちいた〈阿闍世王経〉漢訳諸本に関する文献学的研究

* 堀田和義

現 職：本学非常勤講師

研究期間：2016年4月1日～2019年3月31日

研究課題：ジャイナ教の死生観に関する基礎的研究—断食死儀礼の規定を中心として

□解任（2016年3月31日付）

上田早記子

河崎豊

古荘匡義

藤原美沙

研究所報 第68号

2016年7月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp